派遣専門家オリエンテーション資料

# モザンビーク

REPUBLIC OF MOZAMBIQUE

## 任国情報

1993年

国際協力事業団
国際協力総合研修所

## はしがき

この任国情報は国際協力のために赴任される専門家およびＪＩＣＡ役職員等に、任国での生活上必要な事項についての情報を提供するものです。

本書の刊行にあたっては当該国に派遣中の専門家、ＪＩＣＡ事務所員、プロジェクト調整員、協力隊調整員とその御家族の多大な御協力を得ました。また、外務省、在外公館、その他関係機関の御好意により、貴重な資料の一部を利用させていただきました。

今後も、本書の内容を一層充実させ、常に、新しい情報の提供に努めたいと考えております。

本書が国際協力の分野で活躍される方々の参考となれば幸いです。

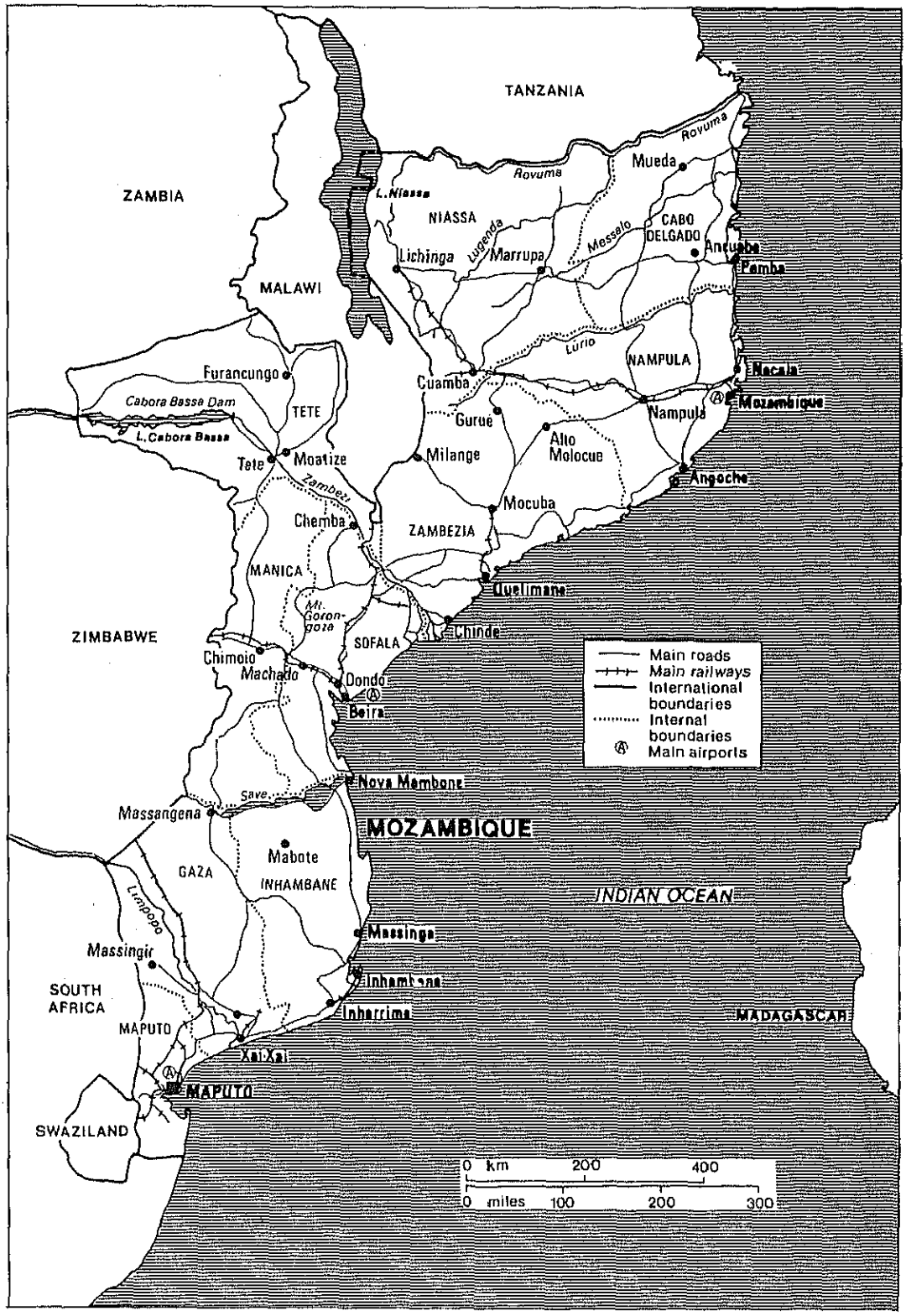
平成 5年12月

国際協力事業団
国際協力総合研修所所長

JICA LIBRARY
1108779[8]

国際協力事業団
22948

# モザンビーク


TANZANIA
ZAMBIA
MALAWI
ZIMBABWE
SOUTH AFRICA
SWAZILAND
MADAGASCAR
INDIAN OCEAN
MOZAMBIQUE
L. Niassa
NIASSA
Lichinga
Lugenda
Marrupa
Rovuma
Mueda
Messalo
CABO DELGADO
Ancuabe
Pemba
Lurio
NAMPULA
Nacala
Mozambique
Nampula
Angoche
Furancungo
Cuamba
Cabora Bassa Dam
L. Cabora Bassa
TETE
Tete
Moatize
Zambezi
Gurue
Milange
Alto Molocue
Mocuba
ZAMBEZIA
Chemba
MANICA
Mt. Gorongoza
Quelimane
Chinde
SOFALA
Chimoio
Machado
Dondo
Beira
Nova Mambone
Save
Massangena
Mabote
GAZA
INHAMBANE
Limpopo
Massinga
Massingir
Inhambane
Inharrime
MAPUTO
Xai-Xai
Main roads
Main railways
International boundaries
Internal boundaries
Main airports
0 km 200 400
0 miles 100 200 300

# 目　　次

## Ⅰ　一般事情


1.　主要指標…… 1
2.　略　史…… 3
3.　政治、外交…… 4
4.　経済事情…… 5
5.　我が国との関係……10


## Ⅱ　生活事情


1.　食生活……14
2.　衣　料……18
3.　住　宅……20
4.　医　療……22
5.　教　育……25
6.　家庭の使用人……27
7.　交通事情……28
8.　通　信……32
9.　マスコミ……33
10.　教養、娯楽、趣味、スポーツ……35
11.　その他のサービス……41
12.　観　光……42
13.　治安、緊急時の心得……43
14.　出入国手続および帰国手続……44
15.　私財の輸送、引き取り、購入……46
16.　社　交……49
17.　任国官公庁……51
18.　在外日本関係機関など……52
19.　地方都市……53

# I　一般事情

## 1.　主要指標

1-1　国　　名　　モザンビーク共和国
Republic of Mozambique

1-2　独　　立　　1975年 6月25日

1-3　首　　都　　マプト　Maputo
人口　107万人（1989年）

1-4　面　　積　　79万 9,380平方キロメートル（日本の約 2.1倍）

1-5　気　　候　　標高 1,000メートル以上の高山帯を除けば中部以北は熱帯性気候、南部は亜熱帯性気候に大別される。乾季と雨季があり、雨季は10～ 4月で、比較的高温である。

表１　マプトにおける平均気温・降水量・平均湿度表

| 月 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 平均気温(℃) | 26.0 | 25.9 | 25.2 | 23.2 | 21.0 | 18.6 | 18.5 | 19.8 | 21.1 | 22.4 | 23.7 | 25.1 |
| 降水量(ミリ) | 172.8 | 140.0 | 88.7 | 60.3 | 28.6 | 16.0 | 19.1 | 16.2 | 46.2 | 65.1 | 68.8 | 86.8 |
| 平均湿度(%) | 77 | 77 | 76 | 78 | 75 | 75 | 74 | 73 | 74 | 75 | 76 | 76 |

1-6　人　　口　　1,608万人（1991年）
人口密度　1平方キロメートル当たり20.1人
人口増加率　2.6%（1980～91年平均）

1-7　人種構成　　マクアロムウェ族（40%）、ソンガ族（25%）、トンガ族、ショナ族、マコンデ族など43部族、ポルトガル系白人、アフリカ人とインド人の混血など

1-8　言　　語　　ポルトガル語（公用語）、バンツー諸語

1-9　宗　　教　　部族信仰（60%）、カトリック（30%）、およびイスラム教（10%）

1-10 政　　治
(1)　政　体　　共和制
(2)　元　首　　ジョアキン・アルベルト・シサノ大統領(Joaquim Alberto Chissano、1986年11月 6日就任)

(3) 議　会　　共和国議会、1院制、定員 250人、任期 5年

(4) 政　党　　モザンビーク解放戦線（FRELIMO ）、モザンビーク民族抵抗運動（RENAMO、またはMNR ）のほか、1990年11月の新憲法による複数政党制への移行に伴い、モザンビーク自由民主党（PALMO ）、モザンビーク民族同盟（UNAMO ）、モザンビーク独立会議（COIMO ）などが設立されたが、いずれも地域・部族主義的色彩が濃い。

1-11 経　　済

(1) ＧＮＰ　　11億 6,300万ドル（1991年）
　　1人当たり　70ドル（1991年）

(2) 主要産業　　農業（砂糖、トウモロコシ、サイザル麻、綿花、カシューナッツ）、漁業（エビ）、鉱業

(3) 貿　易　　輸出（FOB）　1億 3,900万ドル（1992年推定）
　　輸入（CIF）　8億 9,000万ドル（1992年推定）

(4) 財　政　　歳入　4,472億メティカル（1991年）
　　歳出　9,583億メティカル（1991年）

(5) 通　貨　　通貨単位　メティカル（Metical：MT）
　　為替相場　1ドル＝ 3,937メティカル（1993年 8月 9日）

(6) 外貨準備高　　ほとんどない。

(7) 対外債務　　54億ドル（1991年推定）

1-12 日本との時差

時差は 7時間で、日本の正午はモザンビークでは午前 5時である。

1-13 祝 祭 日

1月 1日　新年
2月 3日　国民英雄記念日
4月 7日　婦人デー
5月 1日　メーデー
6月25日　独立記念日
9月 7日　戦勝記念日
9月25日　軍隊記念日
12月25日　ファミリーデー

## 2. 略　史

1498年、ポルトガル人の探検家バスコ・ダ・ガマがこの地に到達した。16世紀半ばにはポルトガルの植民地経営が奴隷貿易を中心に本格化し、1629年にポルトガル領、その後、同海外州となった。

1920年頃から植民地解放運動が始まり、62年モザンビーク解放戦線（FRELIMO ）が結成され、モンドラネが議長に就任した。64年、FRELIMO はタンザニアを基地に武装闘争を開始した。69年、モンドラネが暗殺され、マシェルが議長に就任した。ゲリラ戦を経て、74年 9月、ポルトガルと独立協定に調印した。そして75年 6月25日独立し、マシェルが初代大統領に就任した。

マシェル大統領は独立以来、土地、銀行の国有化などマルクス・レーニン主義に基づく土地と資源の国有化、また国家利益や国営企業の優先など一連の社会主義政策により国造りと開発に取り組んだ。しかしながら独立戦争による混乱に加え、社会開発を促進する人材や資金が極度に不足していた。また、経済基盤は近隣諸国や旧宗主国ポルトガルに依存していた。このような状況で導入された国有化と計画経済は、イデオロギー主導で非生産的な官僚化を促進し、実務的な側面に欠けていた。経済は行き詰まり、1984年以降は自由化政策を取り入れた柔軟な政策をとるなど、変化せざるを得ない状態に陥った。

1986年10月、マシェル大統領が航空機事故により死去し、内外から大きな不安が持たれたが、シサノ新大統領への政権交代がスムーズに行なわれた。同大統領はマシェル大統領の路線を引き継ぎ、内政の安定化と経済再建に取り組んでいる。

## 3. 政治、外交

### 3-1 最近の政情

1975年の独立以来、社会主義を掲げたモザンビーク解放戦線（FRELIMO ）政権と、南アフリカの支援を受けた反政府組織モザンビーク民族抵抗運動（RENAMO）との間で内戦が続き、RENAMOのゲリラ活動による治安の悪化、難民の発生、経済インフラの破壊、経済活動の停滞などきわめて大きな損害を被ってきた。しかし、90年 7月以降、イタリア政府仲介のもと、両者間の直接交渉が行なわれ、同年12月、部分的和平協定に合意した。

また、モザンビーク人民議会は1990年11月 2日、複数政党制を基盤とする民主政治を導入する新憲法を採択した。新憲法は30日発効し、国名はモザンビーク人民共和国からモザンビーク共和国に、人民議会も共和国議会に名称を変更した。これで75年の独立以来15年間続いてきたFRELIMO による 1党独裁体制に終止符を打った。このほか新憲法は市場経済、報道の自由、司法の独立などを明記している。

ローマで行なわれていた和平交渉は、1992年 8月のシサノ大統領とドラカマRENAMO議長との直接会談を経て、10月 4日、モザンビーク包括和平協定が調印された。正式停戦の数日後、局地的事件が生じた以外は、停戦は遵守されており、治安も全国的に好転している。

1992年12月16日、国連安保理は、「国連モザンビーク活動（ONUMOZ）」と呼ばれる総勢 7,000～ 8,000人の平和維持活動（ＰＫＯ）を展開する決議を採択した。決議はまた、ガリ国連事務総長に対し、93年 3月末までに選挙を中心とする和平協定実施の日程策定を求めた。しかし、和平プロセスの遅れから和平協定の規定する署名後 1年以内の総選挙の実施はほぼ困難であり、94年10月頃の可能性が強い。

### 3-2 外　　交

基本方針は、非同盟主義である。独立以来、旧東側諸国との関係が強かったが、1984年以降は経済援助の必要から積極的に西側諸国との接近をはかっている。

南アフリカとは1984年不可侵条約を結び、また89年南アフリカは領内のモザンビーク反政府軍基地の閉鎖を約束した。

周辺諸国との関係をみれば、ジンバブエは1992年 3月モザンビークとの東部国境の警備を強化した。旱魃と内戦を逃れてジンバブエへは毎日 400人のモザンビーク難民が流入しているといわれる。

マラウイとは1992年 1月、防衛安全保障委員会を開き、モザンビーク難民の帰国問題などを協議した。マラウイには約60万人のモザンビーク難民がいるといわれる。

ローマの和平交渉には、旧宗主国ポルトガル、アメリカ、イギリス、フランスがオブザーバーとして参加した。

## 4. 経済事情

### 4-1 概　　観

肥沃な土地に恵まれた農業国であるが、大規模プランテーションによる輸出用換金作物（カシューナッツ、綿花、砂糖、サイザル麻、茶など）の生産に偏り、食糧自給率はきわめて低く、内戦、洪水、旱魃などの被害もあり、食糧事情はきわめて悪化している。また、石油輸入に伴う外貨事情の悪化、南アフリカに対する経済的依存などの構造的問題をかかえ、経済はきわめて脆弱である。また、モザンビーク民族抵抗運動（RENAMO）のゲリラ活動に加え、1980年代に入っての旱魃、原油価格の上昇、世界景気の後退という外的要因によっても経済は著しく停滞した。

このため、世銀・ＩＭＦの協力を得て、1987～89年を対象期間とする構造調整政策として経済再建計画を策定し、同計画のもと、87～88年にかけて為替レートの大幅切り下げ、価格の自由化、利子率の引き上げなどの措置を講じた。この結果、投入財などの輸入増大などにより農業部門、製造業部門とも生産が増大し、87～89年のＧＤＰ実質成長率は年平均約 5%となった。しかし、対外累積債務問題は依然深刻であり、同計画は、91年経済社会復興計画（91～93年）に引き継がれた。この計画は、広範な農村開発に重点をおき、民間部門の拡大により持続的経済成長および貧困の緩和促進を目的としており、また、公企業の民営化など、経済の諸活動における国の役割を縮小し、自由化を進めることにより年平均 5%の経済成長達成を目標としている。

### 4-2 産　　業

1991年のＧＤＰの産業別構成は、次のとおりである。

| | |
|---|---|
| 農　　業 | 38.9% |
| 工業・漁業 | 21.1% |
| 建　　設 | 12.4% |
| 運輸・通信 | 11.3% |
| 商業・その他 | 16.3% |

#### (1) 農　業

農業はモザンビーク経済の基盤である。大多数の人々が従事し、その産品は輸出の大部分を占めている。しかし、外国投資を妨げた内戦と相次ぐ旱魃により、安定しているとはいえない。政府は外資導入、開墾の奨励、灌漑用水の設置などの措置を講じた。

農政の転換により農業は好転しかけていたが、1990年代前期に至り肥沃な農業地帯であるはずの中央部のマニカ州やソファラ州およびテテ州などでも旱魃被害が発生している。91年にはマニカ州やソファラ州で70%の減収となり、国全体では80万トンの食糧が不足した。政府は国連などの指導により、内戦による離散農民の帰農促進などの措置を推進し、あわせて農業生産の向上を目指している。

#### (2) 漁　業

2,800キロメートルの長い海岸線と数多くの内水面を有しているため、漁業

資源は豊富であるが、零細な漁業者が多く、漁業技術者の不足および流通経路が未整備であることなどの理由により満足な資源開発は行なわれていない。また、とれた魚のごく小数しか市場に出されておらず、魚は国民に利用される食料となっていない。

なお、資源維持可能な漁獲量は年間に魚類で50万トン（うち30万トンがアンチョビ、ほかにサバなど）、またエビ類で 1万 4,000トンと見積もられている。特にエビ類は漁獲の大半が輸出専用である。また、日本、ロシア、スペイン、ポルトガルなどの水産企業から得られる入漁権料も大きな国庫財源となっている。

(3) 鉱　業

埋蔵量は正確には調査されていないが、国内に多数の有用鉱物資源を有しており、なかでもタンタライトは世界一の資源量を有し、今後世界の主要なタンタル供給国となる可能性を秘めている。また、鉄鉱石、ボーキサイト、銅、チタンなどの鉱物資源も有望である。

## 4-3 財　政

表１　国家財政の概要

（単位： 100万メティカル）

| | 1988年 | 1989年 | 1990年 | 1991年 |
|---|---|---|---|---|
| 税　収 | 110,097 | 199,800 | 266,400 | 379,953 |
| 所得税 | 29,373 | 43,200 | 52,900 | 79,059 |
| 間接税 | 59,006 | 105,100 | 136,800 | 177,431 |
| 取引税 | 18,508 | 44,100 | 65,300 | 108,915 |
| 税外収入 | 20,572 | 26,700 | 31,600 | 67,247 |
| 歳入合計 | 130,669 | 226,500 | 298,000 | 447,200 |
| 経常経費 | 148,800 | 246,000 | 342,500 | 457,400 |
| 給与など | 24,800 | 43,000 | 65,000 | 101,000 |
| 防衛費 | 58,173 | 102,400 | 136,000 | 178,000 |
| 国営企業 | 11,100 | 12,000 | 14,000 | 12,200 |
| 資本支出 | 139,700 | 227,000 | 350,700 | 500,900 |
| 歳出合計 | 288,500 | 473,000 | 693,200 | 958,300 |
| 不 足 額 | -157,831 | -246,500 | -395,200 | -511,100 |
| 外国援助 | 91,816 | 159,800 | 226,300 | 397,000 |
| 総合欠損 | -66,015 | -86,700 | -168,900 | -114,200 |
| 国外調達 | 52,915 | 81,700 | 168,500 | 127,700 |
| 国内調達 | 13,100 | 5,000 | 400 | -13,200 |
| 差　額 | — | — | — | — |

4-4　貿易、国際収支

(1)　貿　易

内戦は貿易面にも破滅的な影響を与えることとなった。1987年からの経済再建計画でも原材料や資材などの輸入は大幅に増大しているが、輸出はそれほど伸びず、90年には輸入額のわずか14%と低調である。現在では伝統的輸出産品の生産も滞りがちで輸出が伸びず、石油輸入が赤字を拡大している。国内で食糧の自給を行なえず、また基本的な産業資材の生産も行なえないため、赤字基調の貿易構造を改善することは非常に困難である。

モザンビークの伝統的な輸出品はカシューナッツ、砂糖および綿花であるが、現在の輸出の主役はエビである。内戦の終結により輸出の増加が見込まれるが、現行の主要輸出品目では飛躍的な増加を期待するのは困難である。

輸入品のなかでは消費財が大きな比率を占めているが、緊急援助に基づいて食糧の調達が行なわれていることによる。近年原材料や部品や備品の購入が増加してきたが、国内の工業を稼働させるには十分な水準ではない。

長い間、旧ソ連・東欧圏とは政治的に親交が厚かったにもかかわらず、輸出入ともに主要貿易相手は西側諸国であった。東欧の崩壊および南アフリカとの関係改善のため、近年南アフリカを中心としたアフリカ諸国からの輸入が増加している。

表2　貿易額の推移

（単位：　100万ドル）

| | 1988年 | 1989年 | 1990年 | 1991年 |
|---|---|---|---|---|
| 輸出（FOB） | 103 | 105 | 126 | 162 |
| 輸入（CIF） | 736 | 808 | 877 | 899 |
| 収　　支 | -633 | -703 | -751 | -737 |

表３　主要輸出品目　　（単位： 100万ドル、FOB）

| | 1988年 | 1989年 | 1990年 | 1991年 |
|---|---|---|---|---|
| エ　ビ | 44.1 | 39.4 | 43.4 | 60.8 |
| カシューナッツ | 26.5 | 20.0 | 14.3 | 16.0 |
| 綿　花 | 4.9 | 7.4 | 8.7 | 8.8 |
| 砂　糖 | 4.6 | 5.3 | 7.9 | 9.8 |
| コ プ ラ | 4.5 | 1.9 | 2.6 | 4.7 |
| かんきつ類 | 1.9 | 3.3 | 2.0 | 1.9 |
| 石　炭 | 0.4 | 0.3 | 0.4 | 0.2 |
| 茶 | － | 0.1 | 0.5 | 0.8 |
| 合計（その他を含む） | 103.0 | 104.8 | 126.4 | 162.3 |

表４　主要輸入品目
（単位： 100万ドル、CIF）

| | 1988年 | 1989年 | 1990年 |
|---|---|---|---|
| 消 費 財 | 281 | 330 | 338 |
| 食糧 | 176 | 174 | 234 |
| 原 材 料 | 216 | 248 | 255 |
| 原油・副製品 | 61 | 72 | 96 |
| 部　品 | 101 | 88 | 84 |
| 備　品 | 138 | 143 | 201 |
| 合　計 | 736 | 808 | 877 |

表５　主要貿易相手国　　（単位：％）

| 輸出（1991年） | | 輸入（1990年） | |
|---|---|---|---|
| スペイン | 19.2 | イタリア | 9.3 |
| アメリカ | 13.2 | タ　イ | 8.9 |
| 日　本 | 12.1 | ジンバブエ | 6.9 |
| 南アフリカ | 8.7 | アメリカ | 6.6 |
| | | ド イ ツ | 6.3 |

（注）　ドイツは 7月より東ドイツを含む。

(2) 国際収支

表6 国際収支 (単位: 100万ドル)

| | 1988年 | 1989年 | 1990年 | 1991年 |
|---|---|---|---|---|
| 輸出 (FOB) | 103.0 | 104.8 | 126.4 | 162.3 |
| 輸入 (CIF) | -735.6 | -807.7 | -877.5 | -898.7 |
| 貿易収支 | -632.6 | -702.9 | -751.1 | -736.4 |
| サービス輸出 | 156.6 | 166.7 | 173.4 | 202.8 |
| サービス輸入 | -259.3 | -311.5 | -308.8 | -357.1 |
| 民間移転 | 78.0 | 85.0 | 97.5 | 107.6 |
| 公的移転 | 376.8 | 387.5 | 448.4 | 501.7 |
| 経常収支 | -280.5 | -375.2 | -340.6 | -281.4 |
| 外国投資 | 4.5 | 3.4 | 9.2 | 22.5 |
| 元本・利払い | -378.2 | -315.1 | -344.1 | -354.1 |
| その他の資本 | 247.5 | 256.7 | 251.9 | 144.1 |
| 資本収支 | -126.2 | -55.0 | -83.0 | -187.5 |
| 誤差脱漏 | 33.6 | 8.7 | 2.6 | 33.9 |
| 債務繰延べ | 316.7 | 383.1 | 779.3 | 598.2 |
| 債務免除 | 1.6 | 21.1 | 22.3 | 36.6 |
| 未払い金変動 | — | 14.4 | -377.5 | -119.3 |
| 外貨準備変動 | -25.2 | 2.9 | -3.1 | -12.7 |

## 5. 我が国との関係

### 5-1 政治、外交

我が国は1975年のモザンビークの独立と同時に国家承認して77年から外交関係を開設したが、大使館をモザンビーク国内に開設しておらず在ジンバブエ日本大使館が兼轄している。また、モザンビーク側は在中国モザンビーク大使館が我が国を兼轄している。

独立後モザンビークは長らく内戦状態にあったため、我が国からの要人訪問はほとんど行なわれていないが、モザンビークの西側寄りへの経済政策の転換に伴い、モザンビークからは要人の我が国訪問が増加している。

### 5-2 経済、貿易

我が国とモザンビークとの貿易は、1988年以降、自動車などの輸送機械が増加して我が国の大幅な出超になっている。モザンビークからの主要輸入品はエビで、全輸入の71%を占めている。我が国からの主要輸出品は輸送機械（71%）および機械・部品などである。92年の対モザンビーク輸入は19億 8,600万円、輸出31億 9,300万円で12億 700万円の出超であった。

表1　対モザンビーク貿易

（単位：億円）

| | 1988年 | 1989年 | 1990年 | 1991年 | 1992年 |
|---|---|---|---|---|---|
| 輸　出 | 32.82 | 54.10 | 57.76 | 52.02 | 31.93 |
| 輸　入 | 32.77 | 23.61 | 24.28 | 30.12 | 19.86 |
| 収　支 | 0.05 | 30.49 | 33.48 | 21.90 | 12.07 |

表2　対モザンビーク主要輸出入品目（1992年）

（単位： 100万円）

| 輸入品 | | 輸出品 | |
|---|---|---|---|
| エ　ビ | 1,411 | 輸送機械（自動車、トラクター） | 2,267 |
| 伊勢エビ | 377 | 機械・部品 | 415 |
| 鉄半製品 | 119 | 鉄製品 | 160 |
| その他 | 79 | その他 | 351 |
| 合　計 | 1,986 | 合　計 | 3,193 |

### 5-3 経済・技術協力

我が国は、無償資金協力および研修員受入れなどの技術協力を中心に援助を実施している。無償資金協力については、特にモザンビークの食糧事情を考慮して食糧援助および食糧増産援助を中心に実施しているほか、水産、運輸・交通分野において協力してきている。また、1988年度、89年度および92年度には、構造調整支援などのためのノンプロジェクト無償援助を合計65億円供与している。

1992年度は、食糧援助、食糧増産援助など 2国間援助と、難民および国内被災民を対象とした国際機関を経由した援助を実施しており、今後とも、難民支援、復興援助などできる限りの協力を行なっていく必要がある。

表３　我が国のＯＤＡ実績　　（支出純額、単位： 100万ドル）

| 暦年 | 贈与 | | | 政府貸付 | | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 無償資金協力 | 技術協力 | 計 | 支出総額 | 支出純額 | |
| 88 | 13.37(90) | 0.25( 2) | 13.62(92) | 1.73 | 1.20( 8) | 14.82(100) |
| 89 | 47.91(94) | 0.50( 1) | 48.41(95) | 3.23 | 2.67( 5) | 51.09(100) |
| 90 | 17.00(−) | 0.47(−) | 17.47(−) | − | -0.52(−) | 16.94( −) |
| 91 | 13.51(−) | 2.91(−) | 16.42(−) | − | -0.59(−) | 15.83( −) |
| 92 | 36.52(−) | 3.32(−) | 39.84(−) | − | -1.15(−) | 38.69( −) |
| 累計 | 173.77(85) | 8.48( 4) | 182.26(89) | 25.57 | 21.75(11) | 204.01 (100) |

（注）　カッコ内は、ＯＤＡ合計に占める各形態の割合（%）。

表４　年度別・形態別実績　　（単位：億円）

| 年度 | 有償資金協力 | 無償資金協力 | 技術協力 |
|---|---|---|---|
| 1987年度までの累計 | 40.51億円<br>米の延払い輸出<br>(80年度：9.96)<br>米の延払い輸出<br>(81年度：18.65)<br>米の延払い輸出<br>(82年度：11.90) | 113.18億円 | 0.98億円<br>研修員受入れ　9人<br>調査団派遣　19人 |

（単位：億円）

| 年度 | 有償資金協力 | 無償資金協力 | 技術協力 |
|---|---|---|---|
| 1988年度 | なし | 47.77億円<br>首都圏道路改修計画 (5.80)<br>ノンプロジェクト援助 (25.00)<br>ソピーニョー漁業センター護岸整備計画 (0.72)<br>食糧援助 (5.75)<br>食糧増産援助 (9.00)<br>災害緊急援助（飢餓被災民救済）（ＷＦＰ経由） (1.50) | 0.64億円<br>研修員受入れ 3人<br>調査団派遣 13人 |
| 1989年度 | なし | 36.48億円<br>ノンプロジェクト援助 (15.00)<br>漁獲物沿岸運搬船建造計画 (7.48)<br>食糧援助 (5.00)<br>食糧増産援助 (9.00) | 0.17億円<br>研修員受入れ 6人 |
| 1990年度 | なし | 21.50億円<br>ナンプーラ州道路整備計画 (4.50)<br>栄養改善計画 (3.00)<br>食糧援助 (5.00)<br>食糧増産援助 (9.00) | 0.79億円<br>研修員受入れ 7人<br>専門家派遣 2人<br>調査団派遣 5人<br>機材供与 8.0百万円 |
| 1991年度 | なし | 14.04億円<br>食糧援助 (5.00)<br>食糧増産援助 (9.00)<br>小規模無償（ 1件） (0.04) | 0.67億円<br>研修員受入れ 6人<br>機材供与 9.7百万円 |

（単位：億円）

| 年度 | 有償資金協力 | 無償資金協力 | 技術協力 |
|---|---|---|---|
| 1992年度 | なし | 51.80億円<br>漁船修理施設建設計画 (5.73)<br>ノンプロジェクト援助 (25.00)<br>食糧援助 (7.00)<br>食糧援助 (2.50)<br>食糧増産援助 (9.00)<br>災害緊急援助（国内被災民救済）（ICRC、UNICEF経由） (2.50)<br>小規模無償（ 1件） (0.07) | 2.29億円<br>研修員受入れ 5人<br>調査団派遣 39人<br>機材供与 0.9百万円 |
| 1992年度までの累計 | 40.51億円 | 284.77億円 | 5.54億円<br>研修員受入れ 36人<br>専門家派遣 2人<br>調査団派遣 76人<br>機材供与 18.6百万円 |

（注） 1) 「年度」の区分は、有償資金協力は交換公文締結日に、無償資金協力および技術協力は予算年度による。

2) 「金額」は、有償資金協力および無償資金協力は交換公文ベースに、技術協力はＪＩＣＡ経費実績ベースによる。

## Ⅱ　生活事情

### 1. 食 生 活

#### 1-1 食　　料

(1) 一般事情

モザンビークでの国民の主食はトウモロコシ粉、マンジョーカ、米で、本来は国内生産のみで国民の胃袋は満たせるはずであったが、内戦の影響で現在は外国からの援助や輸入に頼っている。また、都市においてはパン食も常食となっている。

この国は南北に細長く、東はインド洋に面し海産物が、西はマラウイ、ジンバブエ、ザンビアなどと国境を接し、肉牛を主体とした畜産が盛んで肉類が比較的豊富である。また、南は南アフリカとスワジランドと国境を接し、近年加工食品や生鮮食料品の輸入が急激に増加している。

日本食料品店やしょうゆ、みそなどを売っている店はなく、日本食料品の購入はヨーロッパか南アフリカで買うか、日本から輸送するしか方法がない。

(2) 主な食料の出回り状況

米――年間を通じて市場で売られている。ただし、インディカ種がほとんどで、パサパサして粘り気がなく日本人の食味に合わない。ときどき、粘質性の日本種も出回るが、安定供給にはほど遠い。

小麦粉――薄力粉（ケーキフラワー）と強力粉（ブレッドフラワー）が売られており、てんぷら、ケーキ、パンなどに使用して問題はない。

パン――食パン、フランスパンがスーパーやパン屋で売られているが、やわらかいパンは限られた店でしか購入できない。菓子パンは数軒のカフェテリアやケーキ屋で売られているが、パサパサで非常に甘く、日本人向きの味ではない。しかし、ホテルのパンは日本と変わらない。

肉類――牛肉、鶏肉、豚肉がスーパーや肉屋で各部位別に加工されて売られている。ただし、牛肉は硬くてにおいがあるので焼き肉には適さず、香辛料をきかせた煮込み料理などに向いている。ローカル市場ではアヒル、羊、山羊、ホロホロ鳥、ウサギが生きたまま 1匹単位で売られている。ハム、ウインナー、ソーセージは一部スーパーに南アフリカからの輸入品があり、それらは品質がよい。

乳製品および鶏卵――牛乳、バター、マーガリン、チーズ、生クリーム、脱脂粉乳、ヨーグルトがあるが、すべて輸入品である。鶏卵はいつでも売られているが古いものも多いので、よく見分ける必要がある。

海産物――魚市場やローカル市場でタイ、サワラ、エビ、キス、ロブスター、イカ、ハマグリなどが売られている。冷凍魚でよければアジ、イワシ、タコも購入できる。ただし、どこの市場も鮮度の悪いものが多く、目方のごまかしもあるので、新鮮なものを公正な価格で購入するのはたいへんである。干物類もあるが、衛生上、日本人の食料の対象にはならない。コンブ、わかめ、ひじき、あらめ、するめは売られていない。

野菜――年間を通じて野菜の出回りはよい。 1年中ある野菜はトマト、じゃがいも、タマネギ、細ネギ、にんじん、ニンニクで、季節野菜としてはキャベツ、ピーマン、セロリ、大根、クレソン、きゅうり、さといも、さつまいも、ショウガ、レタス、いんげん、中国白菜、オクラ、カリフラワー、ナスなどがある。ただし、たいていの野菜が日本のものとは少し質や味が違うので、料理方法を工夫するとよいようである。スーパーには南アフリカから輸入された野菜があり、サラダに利用できる。

果実―― 1年中ある果物はバナナ、パパイアで、季節の果物としてリンゴ、パイナップル、オレンジ類、ナシ、ブドウ、黄桃、プラム、イチゴ、アボカド、スイカ、メロン、ライチ、ジャックフルーツ、シャカトウ、マンゴーなどがあるが、輸入されているものが多い。一般に大味であるが、パイナップル、ライチは最盛期には甘味も強く、たいへんおいしい。

調味料・食用油――スーパーなどで売られている調味料は砂糖、塩、ケチャップ、固形スープの素、ビネガー、マヨネーズ、マスタードなどで、香辛料はコショウ、とうがらし、クローブ、ナツメッグ、シナモン、カレー粉などで、西洋料理に使用するほとんどすべてが揃っている。ただし、しょうゆ、みそ、和風だし、みりん、和がらし、わさび、さんしょう、中華だし、トウバンジャンなど、日本料理と中華料理に使う調味料はほとんど売られていない。食用油は野菜油、ヒマワリ油、大豆油、オリーブ油が売られているが、ごま油は売られていない。

酒類・飲料水――ビール、ワイン、ウイスキー、ブランデー、ジン、ウオツカ、リキュール類は、種類は限られているが常時売られている。主にポルトガルや南アフリカからの輸入だが、モザンビーク産もあり、特にビールは安価でおいしい。清涼飲料水はコーラ、ファンタ、ジュース類が輸入されている。ミネラルウォーターは、ヨーロッパ、南アフリカ、スワジランドから輸入された 1.5リットル入りのものが売られている。

その他――菓子類は一部の店でビスケットやクッキー、アメ、ガムなどの輸入品やアイスクリームが売られているが、種類が少なく飽きてしまうので、ときどき子供用にホームメイドするか日本から送る方がよい。特に学校では毎日おやつの時間があるので、菓子は必要である。モザンビーク製の菓子は、品質や味において問題がある。

スパゲティやパスタ類は常時売られている。缶詰類は種類が多く、料理素材（いんげん、アスパラガス、にんじん、グリンピースなど）、魚肉、果物、コンビーフ、ソース類、ジャム類が豊富である。冷凍食品はスーパーのみで売られており、グリンピースなどの料理素材やピザがある。

(3) 食料の入手

スーパー――外国人が利用するスーパーは市内に10ヵ所ほどあり、ほとんどの食料品や日用品がここで揃う。1992年まであった外貨しか使用できないスーパーも、現地通貨で買物ができるようになった。

市場――市内最大の中央市場（セントラルメルカド）は食料ならたいてい

のものがあり、生鮮野菜と果物の種類が特に豊富である。場内にはインド人商店もあり、日用品、土産物なども売られている。ここはスリ、ひったくりが多いことでも有名である。その他のローカル市場は市内のあちこちにあるが、一般市民用で外国人は利用していない。

インド人商店――調味料、缶詰、小麦粉、香辛料、乳製品など生鮮食料品以外は、品質は落ちるがたいていのものが売られている。日用品も売られている。

魚市場――海岸と中央市場内にあるが、鮮度のよいものは少ない。屋根のない簡単な台の上で売られており、衛生上も好ましくなく、刺し身には向かない。値段は交渉すると安くなることもある。

肉屋――牛肉、豚肉、ソーセージなどが売られている。白人経営の店が急増し、量、質ともよくなって、衛生上問題がなくなった。

パン屋――食パン、フランスパン、店によっては菓子パン、ケーキも売られており、喫茶も兼ねた店もある。

日本から持参した方がよい食料――乾物、調味料（日本料理および中華料理用）、素材缶詰（タケノコ、こんにゃく、チクワなど）、即席ラーメン、菓子類、カレーの素、塩ザケ、珍味などがある。

1-2　食器・調理器具など

(1)　食器・調理器具などの入手

スーパーまたはインド人商店で売られている。

食器――スーパーにはヨーロッパ製の洋食器が売られている。インド人商店には中国、インド、台湾、香港、モザンビーク、東欧製の庶民的な食器が売られている。

調理器具――電気製品ではオーブン付きコンロ（ガス用もある）、ミキサー、ひき肉機、ジューサー、ハンドミキサー、炊飯器、ホットプレートなどがある。そのほかボール、タッパー、鍋、ざる、ポット、フライがえし、フライパンなどが売られている。炊事に使う燃料はガスか電気であるが、両方とも供給が不安定なので、特にオーブン付きコンロの購入はガスと電気兼用がよい。

その他の電気製品――冷蔵庫、冷凍庫、電子レンジ、電気ポット、コーヒーメーカー、トースターなどが売られているが、ほとんどが日本を含む東南アジアとヨーロッパ製である。

(2)　日本から持参した方がよい食器・調理器具など

食器――和食器は何も売られていないので、必要なものはすべて持参する。（急須、茶わん、おわん、はし、土鍋、皿、湯飲みなど）

調理器具――中華鍋、包丁、しゃもじ、おろし金、すりばち、さいばし、うろこ落としなどである。

電気製品――ホットプレートは日本での購入の方がよい。モザンビークの電圧は 220ボルト、50ヘルツなので、海外仕様の製品を購入する。日本仕様の 100ボルトの製品を持参する場合は、トランスを用意する。

プラグは普通 2ピンだが 3ピンもあり、両タイプともいろいろなサイズがあるので、着任時は数種類のプラグを日本から持参した方がよい。乾電池は南アフリカ、中国製が多く寿命は短いが、あらゆる種類が売られている。

1-3 外　食

(1) 飲食店

市内にはレストラン、カフェテリア、テイクアウト、屋台の食堂があるが、日本料理店はない。どの店も仕入れは主に市内の市場からなので、サラダなど火の通っていない料理や生水、氷は衛生上飲食しない方が無難である。

レストラン――主に外国人が通うのは、ホテル内レストランなどの20店ぐらいである。ポルトガル料理店のほか、中華料理店 2軒、フランス料理店 3軒、イタリア料理店 3軒、インド料理店 2軒、ギリシャ料理店 1軒と、ここ1年ぐらいの間に急激に増加しており、今後も増加する傾向にある。なお、一部の店はドル払いである。

カフェテリア――市内のあちこちにあるが、外国人が通うのは 5店ぐらいである。どの店も軽食などがある。

テイクアウト――市内に10ヵ所ぐらいあり、鶏の丸焼き、サモサ、コロッケのほかにチキンカレー、フライドチキンなどがある。

屋台の食堂――主に市場の一角にあり、油で揚げた鶏肉や魚にポテトフライやライスを添えた食事が安く食べられるが、外国人はみかけない。

(2) その他の飲食店

## 2. 衣　料

### 2-1 衣　料

(1) 一般事情

特に衣料品店は市内にはたくさんあり、そのほとんどがインド人の経営で既製服、反物、靴、下着、小物といちおうのものが揃っている。ところが、日本人の好むデザイン、縫製、生地は本当に少なく、購入してもすぐ破れたり、体型の違いから着られないことがほとんどである。

気候は、通常日本人にとってはワイシャツにスラックスでちょうどよいが、1～ 2月は暑いので半袖、 6～ 8月は夜間冷え込むのでセーター、ブルゾンがあった方がよい。

(2) 日本から持参した方がよい衣料

ほとんどすべて持ってきた方がよい。特に15歳ぐらいまでの衣料は粗悪品が多いので、ぜひ日本から持参することをすすめる。例えば体操着、運動靴などである。

また、下着、靴下は家族全員のものを赴任期間分、必ず持参すること。水泳をする人は、水着も持参する。特に、スポーツウエアは必ず持参すること。

(3) 任国で調達した方がよい衣料

マプトで購入できそうなものは短パン、ジーンズであるが、調達した方がよい衣料はない。ただし、ここでしか調達できないバティックやインド模様の生地を購入し、ふだん着をつくるのは楽しいかと思う。

(4) その他の留意点

寝具は毛布、まくら、シーツなどが買えるが、品質が悪いので日本から持参した方がよい。夏布団やタオルケットもあればとても重宝する。雨季には丈夫な日本製の傘を準備するとよい。

### 2-2 礼　装

(1) パーティ

特にモザンビーク独特の習慣はない。友人の家に招待された場合は、男性はスラックスにポロシャツなど襟のあるものを、女性はワンピースなどを着用する。子供は特に決まりはない。

(2) 式　典

男性は背広にネクタイ、女性はフォーマルなドレスを着用する。

(3) その他の冠婚葬祭

式典に準じる。

(4) その他の留意点

マプトの気候は比較的温暖なので、背広は春物でよいが、余裕があれば夏物が 1着あればなおよい。

### 2-3 洗濯、仕立て、修繕、保管

(1) 洗　濯

クリーニング店は市内に数軒ある。通常は使用人が洗うことになるが、問題点としては、洗剤（粉末、固形）をとても多く使うこと、すすぎを十分に行な

わないこと、強い力で洗うため布地が早く傷むこと、十分に乾燥させないこと、アイロンの温度が高すぎることなどがあるので、事前に使用人に洗濯の方法をよく説明しておく必要がある。洗濯機は売られていて、 2槽式もある。乾燥機は売られていない。

(2) 仕立て、修繕

仕立屋は町のあちこちにあるし、ちょっとしたほころび程度ならその場で修繕してくれる。ただし、スーツなどの仕立ては値段が高いわりによくないので、日本からの持参がよい。

針、糸、ボタンなどは売られているが、いちおう裁縫道具は日本から持参することをすすめる。ミシンは足踏み式、電動式ともに売られている。

(3) 保　管

ときどき家のなかに風を通していれば、湿気で衣類が傷むことはない。ただし、風の強い季節は家の隅々まで細かい赤土が入ってくるので、洋服ダンスをよく閉めておく必要がある。

防虫剤はしょうのうが売られているが、においが強すぎるので使用はすすめられない。

## 3. 住　　宅

### 3-1 住宅事情

(1) 一般事情

マプトは1975年の独立以来、住宅の新築は皆無に近い。やっと最近アパートや一戸建ての建築が始まったばかりで、十分な住宅の供給にはほど遠い状態である。したがって、外国人が増えていることと、外国人の住める地域が限られている現状では、住宅の確保はたいへんである。また、住宅不足から家賃もうなぎ上りである。

(2) ホテル事情

外国人が利用するホテルとしては、市内にホテルポラナ、ホテルカルドゾ、カヤクヤンガ、ホテルエスコーラアンダルシアの 4つがある。ホテルカルドゾは改装中で、あらたなホテルとしてホテルカリブが建設中である。

ほとんどの日本人はホテルポラナを利用しているが、設備もよく特に問題はない。料金は、シングル 1泊で 200ドルからである。その他のホテルは、シングル 1泊50～ 200ドルである。マラリア蚊もいるので、蚊取線香は持参した方がよいであろう。

(3) 住宅の探し方

賃貸アパートや独立家屋を紹介してくれる不動産屋などの業者は 2軒あるが、口コミか新聞広告で探すのが一般的である。家具付きの家もある。

(4) 住宅の選定上の留意点

地域――マプトは遠目にはビルの建ち並んだ近代的な町にみえるが、ほとんどの住宅が独立以来、荒れ放題の状態である。ただし、従来から大使館などが建ち並んでいた一部地域（サマーシェル、ポラナ、コーペ）のみ、辛うじて外国人の住める住宅がある。その他の地域は治安、電気事情や水道事情が悪くすすめられない。

水――アパートや独立家屋には大型貯水タンク（最低 1トン）があるか、必ず確認する。市内は通常半日は断水し、 2～ 3日断水する時もある。

電気――消費電力の大きい電気製品が使える配線かどうか、漏電はないか確認する。容量も確認する。

防犯――すべての窓とドアに鉄格子が入っているか確認する。

電話――電話のない住宅に入ると、あとで電話を引くのに回線不足でたいへん時間がかかるので、電話の必要な場合は電話付きの住宅にする。

車庫――独立家屋は通常車庫付きである。アパートの場合は車庫が利用できるか、車庫に鍵がかかるか、車庫にガードマンがいるかどうか確認する。

水回り――排水がスムーズか、水もれはないか、台所、トイレ、洗面所、洗濯室などをよく確認する。

(5) 住宅の契約

契約時に必ず契約書をかわす。家賃は通常 1ヵ月前払いの、ドルでの支払いである。

(6) 電気、ガス、水道などの手続と管理

電話料金の支払いは、2ヵ月分ずつ契約によって現地通貨かドルで電話局に支払う。電話をあらたに設置するのは、待たされる期間が長いのですすめられない。ただし、電話料金をドル払いにすると設置が早い傾向にある。故障した場合は、苦情窓口に連絡する。

(7) その他

防犯対策として、24時間ガードマンを雇うのが普通であるので、信用のおける人に紹介してもらう。最近、警備保障会社もできた。また、犬を飼うのは効果がある。ドッグフードはスーパーで買える。

入居後、住宅の傷みを修理する時は、工事人など、第三者が家のなかに入ることになるので、信用のおける業者に修理を頼む。しかし、危険のない簡単な修理は自分でした方が、他人が家のなかに入ることの煩わしさや時間のロスも少なくてすむことが多いので、そのための工具などを持参するとよい。

## 4. 医　療

### 4-1 赴任前の準備

(1) 予防接種

入国時に予防接種証明書の提示は求められない。しかし、緊急時などに近隣国に入国することも想定されるので、黄熱病とコレラの予防接種はしておいた方がよい。

その他の予防接種として、狂犬病、破傷風、B型肝炎、A型肝炎、ポリオなどを赴任前に接種することが望ましい。予防接種の記録は英文のものを持参する方がよい。

(2) その他の準備

持病のある人は、その症状などを英文で持参すると、海外の病院で受診する時に役立つ。また、派遣前の健康診断書も英文にして持参する。

メガネは買えないので、予備を持参する。

### 4-2 医療事情

(1) 医療機関

日本人が診察を受けられる医療機関は、クルスアズールのみである。この医療機関は南アフリカがつくったもので、設備、医師、看護婦もすべて南アフリカからきている。しかし、小規模なので専門的な治療には向かないが、緊急時や簡単な病気の時は利用できる。中央病院は日本人は利用しない方がよい。

このほか、公式な医療機関ではないが、国連の医療室や現在ＰＫＯで派遣中の自衛隊の医師（ 2人）に診てもらうことも可能である。

(2) 緊急時の対応と措置

最初にクルスアズールに入院して、治療が不可能な場合は南アフリカのクルスアズールの病院に医療専用機で移送する。

病気やけがの状態によっては、ヨーロッパに移送する必要があるので、その時はＪＩＣＡの加入しているヨーロッパアシスタンスサービスを利用するが、今までの当サービス利用状況をみると、必ずしも迅速でないのが問題である。

そのほか、車両による移送もスワジランド経由で南アフリカの病院に可能である。

### 4-3 医薬品など

(1) 携行することが望ましい医薬品

ＪＩＣＡ供与の医薬品セットで、家庭治療薬はほとんどカバーできる。ただし、持病のある人は、その病気にかかわる治療薬はすべて携行する。マラリアについては、予防薬と治療薬は医師に相談して携行する。

子供が学校でシラミをうつされることもあるので、シラミとりの薬を携行する。

また、医薬品の数量は家族の人数で大幅に違ってくるので、人数に合わせた数量を携行する。特に子供用の医薬品は、日本で十分準備することをすすめる。

(2) 任国で調達できる医薬品

日本製はない。薬局では医師の処方せんがあれば薬を買えるが、薬の種類も

少なく期限切れのものも売られているので、利用しない方がよい。

(3) 任国で調達できる衛生用品

石けん（殺菌石けんはない）、ベビーオイル、シャンプー、ベビーシャンプー、消毒アルコール、中国製の蚊取線香、スプレー式殺虫剤、殺鼠剤、綿棒、つめ切り、包帯、ガーゼ、練り歯みがきなどが売られている。

しかし、蚊の防除には品質のよい日本製の電気蚊取りと蚊取線香を、停電が多いので半々で携行する。就寝時は蚊帳を張る必要があるので、大きめの蚊帳を携行する。また、ノミ、ダニの駆除には薫煙式の殺虫剤を携行する。ゴキブリもたくさんいるので、駆除用のマットや殺虫剤を携行する。

また、女性の生理用品は売られているが、品質が違うので日本から持参することをすすめる。紙おむつも価格が高いので、日本から持参することをすすめる。避妊具も持参をすすめる。

(4) 医薬品を使用する場合の留意点

ふだんから国連の医師などと親交を持って、病気の時には医薬品の使用方法を相談するとよい。特に幼児や子供への処方は慎重を要する。

4-4 妊娠、出産、育児

(1) 妊娠した場合の対応

日本人で現地の病院で分娩した人はいない。診察も感染症の危険があるのですすめられない。考えられるのは、南アフリカで分娩するか、日本に帰国する方法である。

(2) 出産後の対応

乳児の治療施設も十分完備されていないし、感染症の危険があるので、現地の病院での診察はすすめられない。

(3) 育　児

育児用品として品質がまあまあで常時売られているものは、粉ミルク、ベビーベッドぐらいなので、その他のものは日本からの持参をすすめる。

大人の場合も同様であるが、特に子供は下痢をしやすいので、外出から帰ったら殺菌石けんでの手洗いを励行させ、水は家では濾過後、いちど沸騰させた水かミネラルウォーターを飲み、生水はとらせないように気をつける。

レストランでは、ジュースに氷を入れてもらわない。また、生ものはなるべく食べさせない。子供が友達の家に遊びに行く時は、相手の家の人に対し、生水は飲まない、加熱したものしか食べないことなどを伝えておいた方がよい。

4-5 手　　術

(1) 任国で可能な手術

極力、マプトでは受けない。

(2) 手術設備の状況

手術を受けられる設備はクルスアズールにあるが、簡単な手術のみである。

(3) その他の留意点

とにかく、マプトでは手術を受けないにこしたことはない。

4-6　任国でよくかかる傷病

(1)　一般の疾病

着任する季節にもよるが、着任当初は水や食物が変わるので、下痢症状を起こしやすい。また、暑い季節は体がだるく、頭痛のすることがしばしばあるので、こうした時は睡眠時間をたっぷりとり、無理をしない。よくかかる疾病にはかぜ、腹痛、下痢症、マラリア、虫ささされ、寄生虫、おでき、皮膚のかび病などがある。

(2)　風土病・伝染病

マラリア、コレラ、チフス、パラチフス、腸チフス、ジフテリア、脳脊髄膜炎、結核、肺結核、狂犬病、破傷風、はしか、百日ぜき、赤痢、アメーバ赤痢、疫痢、しょうこう熱、水ぼうそう、ペスト、らい病、ウイルス性肝炎、流行性小児麻痺、梅毒、淋病、エイズ、フィラリアなどがある。

特に、マラリアではすでに数人の日本人がモザンビークで亡くなっており、高熱が出たらまずマラリアの疑いを持つことである。

(3)　有害動物、病害虫

蚊、ハエ、ブヨ、ムカデ、ネズミ、ゴキブリ、ノミ、ダニがいる。

また野良犬も多いので、特に夜間や子供だけの歩行は避ける。

4-7　保健衛生

(1)　飲料水

マプトの水道水は飲料水として利用する場合、一般に濾過、沸騰させてから飲む。また、市販のミネラルウォーターを飲料水として利用する。

(2)　濾過器の入手法

5リットルのほうろう製がよい。マプトでは売られていないので、日本から持参するか、南アフリカで購入する。もし、水道の蛇口に取り付けるタイプのものを持参する場合は、交換フィルターも必要な数量だけ持参する。

(3)　その他の留意点

家族全員で手洗いとうがいの習慣を持つ。ふきん、タオル、ハンカチ、下着に至るまで、すべてアイロンをかける。

## 5. 教　育

### 5-1 教育事情

(1) 一般事情

モザンビークの教育制度は、基本的には日本と同じ 6、 3、 3、 4年制であるが、専門学校もある。また、私立の幼稚園も市内に数ヵ所ある。

モザンビーク人の教育レベルは、独立以前のポルトガルの教育政策の影響で識字率が極端に低いなど、近隣アフリカ諸国と比べても低いレベルにある。しかしながら、政府は国民の教育に熱心で、マプト市内ではたいていの子供が学校に行っている。

(2) 日本人学校

ない。

(3) 現地校、外国人学校

現地校、外国人学校は、次のとおりである。

| 学校名 | 言語 | 電話 |
|---|---|---|
| ポルトギーススクール | ポルトガル語 | 400864 |
| インターナショナルスクール | 英　語 | 492131 |
| アメリカンスクール | 英　語 | 417941 |
| イタリアンスクール | イタリア語 | |
| フレンチスクール | フランス語 | 400786 |
| スウェディッシュスクール | スウェーデン語 | 743541 |

このなかでは、通常アメリカンスクールとインターナショナルスクールが日本人の子弟の通う学校の対象になる。前者は入学時にある程度の英会話力が要求されるが、授業の内容はいちばんレベルが高いといわれている。後者は英会話能力がまったくない子弟も入学が可能で、学年によっては会話能力の低い生徒だけのためのクラスも編成されている。ただし、両校とも定員いっぱいのことが多く、入学待ちのこともある。

(4) 幼稚園

幼稚園は個人が経営している小規模なものから、個人や法人が経営しているかなり大きなものまであり、入園できる年齢も違う。衛生管理についても、入園の際には詳しく調査する必要があろう。インターナショナルスクールは 5歳から通える。

### 5-2 入学手続および授業料

(1) 日本人学校

(2) 現地校、外国人学校

インターナショナルスクールの入学手続は簡単で、所定の入学申込書に必要事項を記入し、事務所に提出し、授業料を納付すれば完了である。なお、授業料は各学期 1,000～ 1,250ドルで年間 3,000～ 3,750ドル、そのほかに、本代金などが年間約50ドルである。その他の学校は、アメリカンスクールが年間約 6,000ドル、ポルトギーススクールが年間約 600ドルである。

(3) 幼稚園

入園手続は学校と同じである。授業料は 1ヵ月50～ 300ドルである。

5-3 教育関係施設

(1) 図書館

モザンビーク国立図書館があり、図書カードをつくれば無料で利用できるが、本の貸し出しは行なっていない。ほとんどがポルトガル語で書かれた本である。そのほかに利用できそうな図書館としては、イギリス議会図書館があり、利用料金は年間50ドルである。

(2) スポーツ施設

市内にプールが 7ヵ所、テニスコートが 5ヵ所あり、利用は有料である。子供を対象にしたスポーツ教室も有料で開かれている。そのほか、各学校においてエアロビクスなどのクラブ活動がある。

5-4 家庭学習

(1) 家庭教師

英語とポルトガル語の家庭教師は、比較的簡単にみつかる。一般には欧米人かモザンビーク人の教師を雇う。その他の家庭教師も、子供が英語を話せればみつかる。

(2) 通信教育

海外子女教育振興財団の通信教育のほか、各種通信教育の日本の業者に予約する方法が考えられる。

(3) 携行した方がよい家庭用学習教材

絵の具、定規、雑記帳以外すべて持参する。鉛筆、コンパスなどは売られているが、品質が悪いのですすめられない。

また、ハーモニカ、リコーダー、習字道具、百科事典など、子供に応じて必要な教材を持参する。特に、日本語の本はたくさん持参することをすすめる。

パソコン、ワープロは日本でトランスと一緒に準備した方がよい。

## 6. 家庭の使用人

### 6-1 一般事情

使用人にはメイド、サーバント、料理人、運転手、ガードマン、庭師などがあり、たいていの外国人がガードマンとメイドまたはサーバントを雇っている。メイドとサーバントは半々ぐらいである。

使用人はすべて信用のおける人からの紹介で雇った方が、後々問題も起こりにくいようである。また、試用期間を 1ヵ月ぐらいとっておくのもよいと思う。雇用時には住所を確認して、身分証明書のコピーをとっておく。

### 6-2 運 転 手

(1) 雇　用

運転免許証、身分証明書を確認のうえ、雇用することが決まったらそれぞれコピーをとっておく。雇用条件については、特に契約書は必要ないが、ノートに書いて確認のサインはもらっておいた方がよい。車の簡単な修理のできる運転手は重宝する。

(2) 日常管理

通勤、通学、買物、食事、夜のパーティ、空港送迎など運転手は勤務時間が不規則になりがちなので、無理な勤務にならないように気をつける。また、勤務が続いて運転手が食事を食べに自宅に帰る時間のない時は、簡単な食事を出してやった方がよい。

(3) 教育指導

一般にマプト市内は整備不良車が多く走行しており、思わぬ事故を起こしやすいので、安全運転を徹底させる。また、ふだんから洗車や車の掃除はもちろん、簡単な乗車前の点検も行なう習慣をつけておく。時間を守ることや、盗難防止のため待機中に車から離れないことも指導する。

(4) その他の留意点

車の盗難が多いので、自動車の登録証は運転手に持たせない方がよい。夜は自動車は自宅の車庫に保管し、運転手の家に乗って帰らせない。そのためにも、運転手の家は自宅から近い方がよい。

### 6-3 メイド／サーバント

(1) 仕事の種類と人数

1～ 2人雇う。主な仕事は洗濯、掃除、アイロンがけである。

(2) 雇　用

(3) 日常管理

メイドなどの家族、親戚、知人を門から内側に入れないよう注意する。

### 6-4 庭師、ガードマンなどの雇用

(1) 雇　用

## 7. 交通事情

### 7-1 交通手段

(1) 一般事情

モザンビークでは、日本と同じく車は左側通行である。マプト市内中心部では、公共の交通機関としてバス、乗り合い自動車、タクシーが使える。

バスは公共機関が運営する交通システムであるが、台数が増えたもののいつも込み合っている。乗り合い自動車は、路線はほぼバスと同じであるが、個人が経営していてスピードを出すので危険である。バスともに料金は安く、だいたい20円ぐらいである。いちおう停留所はあるが路線図はない。これらは 5～30分に 1台ぐらいの割で走っているものの、時間はまったくあてにならない。したがって慣れないうちはこの交通手段を使うのはむずかしい。また、スリや事故が多発しているので、外国人はほとんど利用していないようである。

タクシーは、まず道では絶対につかまらない。タクシー乗り場は、大きなホテルの前か中央市場の駐車場にある。そこに行けばだいたいタクシーをつかまえることができる。ホテルで待っているタクシーは電話連絡が可能であるが、中央市場で待っているものは電話連絡は不可能である。ほかに、ラジオタクシーマプトという会社が、電話連絡でタクシーをアレンジしてくれる。そのほか個人経営のタクシーがあるので、その運転手と知り合いになっておけば電話で連絡がつく。

タクシーのすべてに料金メーターがついているわけではない。むしろ、ついていない方が多いと考えるべきであろう。また、メーターがついていない場合は、値段の交渉をしてから乗るべきである。これは、あとからのトラブルを避けるためである。市内中心部はどこでも約 500円で行ける。

(2) 自家用車を利用する場合

マプトは公共の交通機関がお粗末なため、だいたいの外国人はプロジェクトの車か、自家用車、バイクを使っている。ここはメインの道路は日本より広い。したがって、交通事故は少ないように考えられるが、車のメンテナンス、運転マナーの悪さ、道路の陥没、たび重なる停電による信号機、街灯の不稼働などにより、交通事故はかなりの数にのぼる。特に 8:00、12:00、14:00、17:00、夜間は要注意である。（マプトの営業時間は、だいたい8:00～12:00、14:00～17:00 である。昼食は家に帰って食べる人が多いので、その出勤、帰宅時間帯に道路が込む）

自分自身で車を運転しても構わないが、家族のためにだいたい運転手を雇っている。特に子供がいる家庭は学校の送り迎えはすべて車であるので、運転手の必要性が高い。車を使う場合は、必ず運転免許証と車の書類を携帯する。マプトでは市内に警察官がたくさん立っていて、よく車を止めて書類や免許証を調べる。

ガソリン代は 1リットル当たり約70円である。今のところ日本より少し安い。以前は期間当たり決められた量しか買うことができなかったが、今はいくらでも買うことができる。だいたい 1～ 2週間に 1度入れれば足りる。しかし、外

貨事情が悪化した時は燃料を輸入することができず、燃料不足に見舞われる。したがって常に燃料の有無を確認し、できれば 1週間分ぐらいストックしておくのが望ましい。

(3) レンタカーなどを利用する場合

レンタカー会社は 3軒ある。(AVIS、Hertz、Mozambique Carrental ) どれも空港で手続することができる。Hertz はホテルポラナでも手続できる。支払いはすべてドルの先払いである。

一般的なルールをあげると、どの会社も運転手付き、運転手なしどちらでも選ぶことができる。料金は車種や走行距離によるが、だいたい 1日50〜80ドル(運転手付きだとプラス10ドル程度)である。ガソリン代は含まれていない。特約で事故や対人に対する保険もつけ加えることができる。

これらの車を借りたい場合は、免許証の提示は当然のこととして、21歳以上で免許証を取得してから 2年経過していないと借りることはできない。

(4) 道路地図

ここでは特別な道路地図はない。市内用の地図は、ホテルポラナの受付や町の本屋、文房具屋で手に入る。この地図には学校、マーケットの場所など、いろいろと情報が入っているので便利である。

7-2 交通事故

(1) 対処方法

もし交通事故にあったら、すぐ警察に届けるべきである。よく警察に届けないで処理する場合があるが、その場合、保険は出ない。事故が起こった時、どちらの側に過失があるかということが問題となるが、相手側に過失がある場合が多い。というのは、事故は外国人同士の間に起こるよりも、モザンビーク人と外国人との間に多く起こる。多くの場合、モザンビーク人の車はウィンカーが壊れているのに急に曲がってきたり、ブレーキがきかなかったり、無理な割り込み、追い越しをしてくるからである。普通に運転している限りは、自損事故はあまり起きない。もっとも子供の飛び出しは多いので、飛び出してきそうなところは十分スピードを落とす必要がある。

事故では車と車の追突がいちばん多い。追突といってもひどいものではなく、聞く限りではバンパーやウィンカー、ランプ類、ドアが壊れる程度である。事故が起こった時は、すぐに車を止めて話し合いとなる。時間がない時は、警察に届けるのはあとでもよい。相手側に過失がある場合は、相手の名前、住所、働き場所、連絡先などをすべて聞く。すべての人は身分証明書を常時携帯しているので、これを確認する。そして車の修理の交渉となる。相手が外国人の事故の場合は、あまり心配しなくてもよいが(保険をほとんどつけている)、モザンビーク人や政府、軍隊の車との事故は交渉がたいへんである。したがって、保険はかけておくのが望ましい。車の修理は、出してもかなりの日数がかかる。ひどいものだと数ヵ月というのもある。したがって、行きつけの信頼できる修理工場を持っていることが大切である。

(2) 救急病院

もし人身事故となってしまった場合は、すぐに救急病院に運ばなければならない。救急病院としてはクルスアズールがある。24時間態勢で、救急車もある。救急車が出払っている時は、自分の車が使える場合はそれでけが人を運ぶことができるが、そうでない場合は、通りがかりの車に頼んで運んでもらうしかない。

救急病院で施される医療技術は、きわめて簡単なものである。もしけががひどい時は、すぐに南アフリカの病院に運ぶ準備をしなければならない。

(3) 盗　難

マプトでは車の盗難はとても多く、毎日新聞に数件、車を捜してほしいという広告が出ている。盗難はいつ起こるかわからないので、車の書類は常に自分で身につけておいて、車のなかには保管しない。車の書類の名義と運転者が違っていても構わない。つまり、車の書類を持っている人が車の所有者なのである。中古車を買っても、名義変更の必要はない。

盗難防止には、市場などに出かけて駐車する場合は子供に小銭を払って見張ってもらうか、運転手を雇う。また車にはアラーム、ハンドルロック装置、ギアロックなどをつけることが望ましい。長期に家を留守にする時はバッテリーをはずしたり、電気系統に細工をして絶対に動かないようにしておく。

不幸にして車を盗まれた時は警察、保険会社に届けて、できれば新聞広告を出す。普通は出てこない。

盗難は、バイク、自転車にも多い。これらは駐輪時、太い鎖で柱や門につないでおく。

7-3 交通違反

(1) 交通法規

交通法規は日本とほぼ同じである。車は左側通行なので、日本と同じように運転ができる。ただ、右折する時は日本では小回りをして曲がるが、ここでは大回りをして対向車線の右折車とクロスを書くように曲がる。バイクの右折も同様である。

50cc以下のバイクは、免許証を必要としない。

交通法規ではないが、大統領官邸前と後ろの道路では、誰も車を駐停車することはできない。

(2) 対処方法

市内のいたるところに警察官が立っている。そして、書類、免許証、あるいは車の整備不良などを調べている。その時、不備があれば免許証のとりあげとなる。免許証をとり返すには反則金を払うが、これは煩雑な事務手続が必要なうえに、免許証を紛失される心配もあるので、通常はその場でだいたい 1,000円程度の反則金を払うことになる。駐車違反についても、反則金はその場で払う方がよい。

違反を重ねた場合でも、日本のような点数制度はなく、免許をとりあげられるというような話は聞いたことがない。

## 7-4 車の修理

### (1) 部 品

必要な車の部品をみつけるのは、たいへんむずかしい。いちおうかなりの数の車部品店があるが、どこも不十分である。各メーカーの代理店は、もう少し部品が揃っている。トヨタ、ニッサン、三菱、イスズ、ホンダ、ベンツ、ボルボ、プジョーなどの代理店があり部品を販売しているが、値段は高い。

その他の方法としては、輸入代理店を使って輸入もできるが、かえって手続に時間がかかる。たまには地元の市場に手に入れたい部品が出ていたりするので、ときどきのぞいてみるのもよいかもしれないが、たいてい盗品である。

### (2) 修理工場

修理工場はたくさんある。しかし、ほとんどが家内工業的である。各メーカーの代理店の方がよいかもしれないが、信じられないくらいに高く、日本以上である。また、代理店だからといって安心はできない。これで修理をしたのかと疑いたくなるようなやり方で、車が帰ってくる場合がある。

どこの工場に車を預けても 1週間は帰ってこないと考えた方がよい。車を預ける時は書類は渡さないのが当然だが、そのほかジャッキなど、ついているものは極力はずす。盗難のおそれがある。

また、修理に新しい部品が必要な場合は、通常は車の持ち主が部品を探すことになる。したがって、車の修理中は足まめに工場に出向いて進行状況を把握した方がよい。

とにかく車を修理に出す時は、知人に聞いてから工場を選んで出すべきである。

## 8. 通　　信

### 8-1 電　　話

(1) 一般事情

電話の普及は広く進んでいて在留邦人宅、外国人宅および役所などにはほとんど設置されている。

(2) 国内電話

市内電話は、通常は普通に会話できる。市外電話はめったに通じないが、根気よくダイヤルすれば通じることもある。最近、市内の郵便局に新しい公衆電話が設置され、これはよく通じるようである。

(3) 国際電話

国際電話は込み合っていることが多く、待たされるし声も聞きとりにくいことがある。電話料金をドル払いにすると、ダイヤル直通になるので比較的早く通じる。日本までの料金は、1993年 9月現在、 3分以内が約 2,800円であり、上記公衆電話も利用できる。

### 8-2 電　　信

(1) テレックス

自宅に設置する場合は、市内にある業者に頼む。電話局でも受信と発信ができる。自宅および電話局とも回線が込み合っていて、通じにくいことが多い。

(2) ファクシミリ

自宅に設置する場合は、市内にある業者に頼むと約 3,000ドルである。市販されているものを自分で設置する方法が安上がりであり、日本から持参すればもっと安いが、トランスを忘れないようにすること。電話局でも発信と受信ができる。自宅および電話局とも回線が込み合っていて、通じにくいことが多い。

(3) 電　報

郵便局より打電できる。

### 8-3 郵　　便

(1) 一般事情

普通外国人は、職場か自分専用の私書箱を利用して郵便物を受け取ることになる。小包と書留は私書箱にその通知書が入るので、身分証明書を持って郵便局にとりに行く。書留はすぐに受け取れる。小包は検閲の後、手数料、税金を払って受け取る。

日本～マプト間の航空郵便は、通常10日～ 1ヵ月で到着するが、ときには 1年以上かかったり、紛失することもある。船便は 2ヵ月以上かかって到着する。

(2) 課　税

入国後、半年間は小包は無税で引き取れるが、小包が到着するたびに書類を揃える必要があるので、高価な電気製品などがなく食料品、雑貨などのみの場合の引き取りでは、税金などを払った方が金額も安い（10キログラムの荷物で手数料込みで 500円前後）ので合理的であると思われる。

## 9. マスコミ

### 9-1 新　聞

(1) 主な日刊紙

マプトには『ノティシアス』（ニュースという意味）という日刊紙がある。ここの公用語はポルトガル語なので、ポルトガル語で書かれている。1部15円で、日曜日を除いて毎日売られている。日曜日には『ドミンゴ』（日曜日という意味）が売られている。これもポルトガル語である。どちらも街角で売られている。

『ノティシアス』はちょうど日本の夕刊紙ぐらいのページ数であり、ニュース、政府公報、天気、広告、放送番組、映画案内、イベント情報、スポーツ、子供のページなどがあり、マプトで生活する人には利用価値がある。『ドミンゴ』は、ニュースより特集や情報が載っている。

このほか『デスアフィオ』というスポーツ新聞が水曜日に発行されている。

(2) 本邦日刊紙

本邦日刊紙はない。入手方法として、ヨーロッパにある日本の新聞社からの郵送があるが、これだと約 1週間遅れで届くので、日本出発時に日本の代理店で申し込んでおくことをすすめる。最近、日本発送の新聞が 3日遅れくらいで到着している。

(3) 欧米紙

スーパーで、南アフリカとスワジランドの日刊紙を当日の夕方買える。

その他の欧米紙は、本邦日刊紙と同じくヨーロッパなどに注文する必要がある。

### 9-2 ラ ジ オ

(1) ラジオ放送局

ラジオモザンビークという放送局がある。ポルトガル語放送のほか、地方ごとに13の現地の言葉で放送されている。マプト地方ではシャンガーニ語の放送がある。毎日5:00頃～0:00頃まで放送している。約 1時間ごとにニュースを放送する。また 13:00に英語放送があり、ポルトガル語のわからない人用にモザンビークの情報を流している。

(2) ラジオジャパン

ガボン中継が 1日 4回受信できる。6:00、10:00、18:00、0:00である。しかし、天候や季節によって受信状態の悪い時や、南米ギアナ中継の方がよく受信できることがある。

(3) 任国で聴取可能なその他の外国放送

南アフリカの放送は、1日中きれいに入る。そのほかＢＢＣ、ＶＯＡなどもよく入り、世界各国の有名な放送はほとんど受信可能である。

### 9-3 テ レ ビ

(1) テレビ放送局

モザンビーク国営放送局（ＴＶＭ）は、1993年から本格放送に入り毎日放送している。また、93年にラジオテレビクリマ（ＲＴＫ）も放送を開始した。

放送は17:00〜23:00頃までである。週末は映画を放送することが多いので、放映終了はもっと遅くなる。

プログラムは自局制作のものはほとんどなく、だいたいは海外の番組の吹き替えものが多い。

(2) テレビ受信

ここの方式はＰＡＬであり、日本とは方式が違うので、日本からテレビを持ってくる時はビデオと併用を考えてマルチシステムをすすめる。

モザンビークの放送は室内アンテナで受信することができる。しかし、南アフリカやスワジランドの放送を受信するには室外アンテナとブースターが必要であり、マプトで購入できる。

## 10. 教養、娯楽、趣味、スポーツ

### 10-1 映画、演劇

(1) 映画館

市内に13軒の映画館がある。前売り券は販売されずに、上映時間の少し前に行って券を買うが、いつも込んでいる。映画はヨーロッパ、香港、アメリカ、インドの映画が中心で、ときどき日本映画も上映される。言葉がポルトガル語以外の場合は、字幕がつく。

上映開始時刻は、17:00と20:00頃である。映画によって年齢制限があるので、子供はめったに入場できない。

映画館は発電機を持っていないので、停電の時は上映中止か、停電が終わってから上映される。

(2) 劇 場

映画館のうち 3軒は劇場も兼ねている。出し物は新聞の広告でわかる。演劇、ダンスショー、そのほか海外からの劇団や歌手のコンサートが開かれる。指定席は通常ないので、十分時間に余裕を持ってでかけるべきである。

ほかに屋外の劇場が市内に数ヵ所あり、コンサートなどが催される。

### 10-2 出版・書籍

(1) 一般事情

書籍の多くは政府機関が出版している。小説や辞書、そのほか専門書、解説書などはほとんど輸入品である。1991年 7月に国会で出版の自由を大幅に認める法律が可決されたので、今後書籍の種類は豊富になると思われる。

週刊誌は毎週金曜日に『テンポ』が発行されており、約25円という安さもあって人気がある。内容は、国内の最新情報を写真中心にまとめてあり、たいへんおもしろい。経済については『エコノミア』と『コメルシオ』という月刊誌がある。歴史誌としては、『アルキボ』が 1年に 4回ぐらい出版される。

(2) 書 店

町のなかにはかなりの数の書店がある。だいたい一緒に文房具も売られている。本はすべてポルトガル語である。日本のように注文してとり寄せるということはできない。店のストックが終われば、それまでである。

### 10-3 語学学習

(1) 語学学習施設

語学学習施設は、マプトにいくつかある。習えるのは英語、ポルトガル語、フランス語などである。省庁主催と個人経営のものとがある。省庁主催のものは、主に公務員を対象としたものであるが、一般の大人も入ることができる。ただし、その場合は公務員よりも授業料が高い。

個人経営のものは、大人と子供両方を対象としている。コースが始まる時はその広告が新聞に出るので、それをみて申し込めばよい。

(2) 家庭教師

マプトには語学学習施設はあるが、だいたいの外国人は個人レッスンを受けている。

教師のみつけ方は、友達や自分の所属している事務所の紹介である。授業料は、だいたい外貨払いである。平均的授業料は、 1回 1時間で約20ドルである。

10-4 文化活動、文化施設

(1) 一般事情

マプトには、いくつかの常設の文化施設がある。また、ときどき展覧会や特別文化イベントが開かれる。これは、新聞にそのつど広告が出る。いくつかの文化施設をここに紹介する。

自然歴史博物館――建物はゴシックスタイルで、もともと小学校に使われていたところである。動物、鳥類、昆虫、魚類のはく製、昔使われていた生活用具、楽器、装飾品などの展示がある。圧巻なのは、象の胎児を 1ヵ月ごとはく製にして展示したものである。これは、世界にひとつしかないそうである。

革命博物館――植民地時代からの抵抗と独立へのプロセスが写真、武器、地図などで紹介されている。そして頼めば、案内人がモザンビークの歴史を説明してくれる。

貨幣博物館――この建物はマプトがまだロレンソマルケソという名前だった頃、もっとも早くに町ができたところに建っている。つまり、この建物の周りは港が目の前ということもあって、もっとも早くに開けたところである。この建物は、独立前、知事の家であったといわれている。この博物館はバーターシステムの時代から、今の貨幣に至るまでの歴史を展示している。図書館もついている。

要塞――これは、今一般公開されていない。ポルトガル人の植民地支配に対抗して戦ったもっとも有名なリーダー、ングングニャーネの記念物がある。

モザンビーク歴史記録保管所――モザンビークの歴史に関する資料が揃っている。マプト市内に 2ヵ所ある。

文化遺産記録保管所――マプト市内に 1ヵ所ある。文化遺産に関する資料が揃っている。

カザベーリャ――演劇を行なっている。主に大人用であるが、ときどき子供用に人形劇や映画を上演、上映している。

ブラジル文化センター――いろいろなものが展示されており、そのつど展示内容が変わる。新聞に広告が出る。また、ここでは海外持ち出しに必要な証明書をつけて、絵や置物が買える。視聴覚室があるので、小さい講演会やミーティングを開きたい時、ここを借りることができる。

(2) 日本・任国友好協会などの有無と活動の内容

企業が中心となった日本モザンビーク協会があるが、ほとんど活動していない。

(3) その他の文化活動、文化施設

マプト市内にはいくつかきれいな公園がある。毎日掃除されているので、たいへんきれいである。もっとも大きな公園は、植物園である。このなかには小さなコンサートができるスペースがあり、日曜日などギター演奏が行なわれ、

ただで聴くことができる。

動物園もある。これはマプトの中心からかなり離れたところにあり、ワニ、カバ、サル、サイ、ライオン、豚、鳥などがいる。

ファシムという大きな屋外展示場がダウンタウンにあり、何か大きな催し物があるとそこで開かれる。毎年 8月の終わりから 9月の初めにかけて国際貿易展が開かれる。

10-5 写真、ビデオ

(1) 写 真

以前はマプトのどこでも写真を撮ることは内務省、あるいは国家情報部長の許可が必要であったが、1991年 2月 4日発行の通達によれば、個人的に自分のためだけの写真を撮る場合は許可が必要ではなくなった。しかし、ジャーナリストや仕事で写真を使う人は、今までどおり国家情報部長からの許可証を常に携帯せねばならない。

いくら個人写真は許可がいらなくなったといっても、撮ってはいけない場所はあり、空港、大統領官邸の周り（この後ろは海岸がすぐ近くで景色も美しいが、ここも禁止されている）、軍事施設、省庁の建物などがそれである。

マプトにはいくつかの写真屋がある。そこでフィルムは手に入るし、現像もしてもらえる。どの店も最近日本製の最新の現像焼付機を購入したので、短時間で受け取れる。ただし、日本より高い。フィルムを買う時気をつけねばならないのは、期限切れではないか、またメーカーは信用がおけるかといったことである。

ドル支払いの店もあるが、それはたいへん高いので一般の店を選んで使うようにした方がよい。ドル支払いだからといって、別に質がよいというわけではない。いくつかの店では、証明写真など、パスポートサイズの写真を撮ってくれる。ただし、日本のように修正してくれるわけではないので、日本から余分に写真を持ってきた方がよい。

カメラ用品はほとんど売られていないので、日本から持参する。また、カメラなどの特殊な水銀電池なども持ってきた方がよい。

(2) ビデオセット

ビデオはここではたいへん人気がある。テレビ放送が充実していないので、そのぶん需要が高いようである。ほとんどの外国人や金持ちの人は、必ずビデオデッキを持っている。そして友人同士で交換してみているようである。ビデオデッキはマルチシステムだが、 3倍速のシステムがついたものがないので、日本での購入の方がよい。ほとんどのビデオカセットは日本の方式ではなくＰＡＬなので、日本のビデオデッキだとみることができない。

レンタルビデオショップも 5ヵ所ほどある。ポルトガル語の字幕付きであるか、ポルトガル語に吹き替えられたものである。

そのほか、ニュース番組などは情報省の図書館に行けば貸してくれる。

(3) ミュージックテープ

ラジオモザンビークは、録音用のスタジオを持っている。音楽のライブラリ

ーも併設されていて、民族音楽や商業音楽を聴かせてくれる。そこでは販売も行なっている。ほとんどがカセットテープで、レコードは少ない。最近ＣＤが売られるようになってきた。

町では日本のレコード店のように音楽だけを取り扱っている店というのはない。普通の店でミュージックテープは売られている。英語、ポルトガル語のものがほとんどであるが、新しいものはない。

10-6　音楽鑑賞、演奏、民族楽器

(1)　音楽会、コンサート

小さなコンサート、音楽会は劇場で開かれる。たまには外国のミュージシャンもきて、コンサートが開かれる。大きいコンサートの場合は、スタジアムで開かれる。また、定期的にジャズのセッションがレストランで開かれる。

(2)　コーラス、演奏グループ

職業としての音楽グループはある。だいたいレストランで演奏しているようである。

(3)　ピアノなど

ピアノの演奏会が開かれたのを聞いたことがない。しかし、ホテルポラナのダイニングルームでピアノの生演奏をしていることがある。

ここにはピアノの調律師がいないので、ピアノを維持するのはむずかしい。調律師は南アフリカから呼ぶしかないが、その維持費はたいへん高い。電子ピアノは高いが売られている。習いたい人はピアノの教師をみつけるのはむずかしいが、口コミでみつけられる。その場合は個人レッスンとなる。

(4)　レコード

レコードはほとんど現代音楽で、伝統音楽のレコードは売られていない。普通の店でモザンビークの音楽のレコードは売られているが、数は少ない。

(5)　民族楽器

もっとも有名な民族楽器は、ティンビーラという木琴のようなものである。これにあわせてダンスをする。しかし、これも後継者難でこの楽器を演奏できる人がだんだんと少なくなってきている。マプトでは私的なグループが、この楽器の演奏を教えている。

(6)　その他の楽器

楽器は売られていないに等しいので、必ず日本から持参すること。

10-7　手芸、絵画、美術工芸

(1)　手　芸

ここ独特の手芸というものはない。しいていえば、パイナップルの葉で編んだバスケット、マット、家具、お盆などがある。これはたいへん丈夫で、値段もそんなに高くない。また、市中心部の広場ではモザンビーク人の女性が編んだセーターや帽子、赤ちゃん用の服が売られている。

また、家具屋には生なり色の綿糸で編まれたテーブルクロスやベッドカバーが売られている。値段はかなりするが、値打ちものである。

ここの民族衣装としては、カプラーナという女性が身につけるものがある。

それは 1枚布でスカートの上に巻きつけている。この絵柄が非常に独特で、テーブルクロス、壁かけなどに使える。町の店でたくさん売られている。また、これを専門につくっているモザンビーク人の女性グループがある。そこのワークショップでは、バティック手法でカプラーナをつくっている。

(2) 絵画、美術工芸

美術館には、モザンビークで活躍しているアーティストの作品が展示されている。彼らの作品は強い色彩で、カーブをよく使った絵柄である。これらは戦争、植民地時代の悲惨さや悲しみ、苦しみを表現しているので、ある意味で非常に暗いモチーフである。しかし、この国の伝統的な手法が使われている。

常設の展示場としては美術館しかないが、そのほかギャラリーで彼らの作品を展示し、販売も行なっている。

ここには、黒たんなどの彫物がある。だいたいモチーフは暗い。それぞれの表情をみても本当に悲しそうである。そのほか、壁にかけるマスク、灰皿、ナイトテーブル、キッチン用品をかたどったもの、杖、アクセサリーなどいろいろなものがある。

バティックの絵もよく売られている。このモチーフもやはり暗く、悲しい絵柄が多い。

10-8 趣　味

(1) 園　芸

市内の土質は砂地が多いが、気候がよいので何を植えてもだいたい育つ。ただし、種子を手に入れるのはむずかしいので、日本からの持参をすすめる。肥料、植木鉢はここで買える。

独立家屋の場合、庭師を雇った方が、いろいろ情報を教えてくれるのでよい。

(2) 釣　り

マプトは海に面しているので、よい釣り場が近くにある。釣り道具もここで手に入る。土・日曜日は釣り場にたくさんの人がきて、釣りをしている。船を持っている人は沖に釣りにでかけてもよいが、海岸でも十分楽しめる。たまに、釣り大会が開かれている。

10-9 娯楽、遊戯など

(1) 娯楽、遊戯、ゲーム

子供の遊園地として、フェイラポピュラールがある。ここは昼からの営業で、朝まで営業している。乗り物はジェットコースターの類いはないが、ゴーカートや回転ブランコがある。ゲームコーナーもある。

(2) 芸能興行

外国のサーカスやプロレスがたまにくるが、モザンビークの伝統音楽や伝統舞踏をみる機会はほとんどない。伝統舞踏は、たまに音楽学校の先生や生徒達の発表会のようなものが開かれる。

10-10 スポーツ

(1) ゴルフ

ゴルフ場はひとつある。会員にならなくてもプレーできる。ただし、道具の

レンタルはないので日本から持参する。靴は運動靴でもよく、特にゴルフシューズをはく必要はない。ときどきゴルフ大会も開かれる。

(2) テニス

テニスクラブは 2つあり、会員にならなければプレーできない。テニスを教えてくれるコースもある。ラケット、シューズ、ボールなどは売られてはいるが価格が高く、品揃えが少ないので日本から持参する。

(3) 水 泳

スイミングクラブがいくつかある。そこのプールを利用するには、会員になる。ホテルにもプールはあるが、宿泊客にしか開放していないホテルもある。

水着は売られているが種類が少ないので、日本から持参する。

(4) その他のスポーツ、用具、ウエア

どんなスポーツをするにしても用具、ウエア類は必ず日本から持参する方がよい。マプトでは品数が少ないし、常時売られているということもない。

ゴルフ、テニス、水泳以外でここでできるスポーツは、サッカー、バスケットボール、バレーボール、卓球、バドミントン、ホッケー、スカッシュ、野球、エアロビクス、ウエイトリフティング、柔道、空手、乗馬、ヨット、ウィンドサーフィンなどで、スポーツクラブ主催のものと個人の同好会と両方ある。

(5) スポーツクラブなど

上記を参考にされたい。

10-11 風俗営業

市内のホテルにはバーがあり、アルコール類が飲める。一般市民の通うローカルバーもあるが、危険で不衛生なので外国人はあまり利用しない。ディスコは市内に数ヵ所あり週末には込み合い、ショーも開かれているが、やはり危険である。夜の外出はマラリア蚊に刺される可能性が高いので、すすめられない。

キャバレーやカジノはない。

10-12 子供の遊び

子供の遊びは日本と大きくは違わない。ただ違うのは、遊び道具の多くが手づくりということである。コーラの缶やタイヤを利用して、器用に押し車をつくったりする。女の子はダンスをしたり絵を書いている。少し大きくなると、男の子はバスケットボールやサッカーをする。

外国の子供達には自転車乗り、スケートボード、サッカーが流行している。また、テレビゲームやコンピューターゲームを結構持っているので、必要なら日本からの持参をすすめる。

## 11. その他のサービス

### 11-1 美 容 院

約10軒の美容院がある。現地通貨払いかドル払いかは、店によって違う。かなり込み合っていて待たされることを覚悟しなければならない。

日本人の髪はストレートなので、美容師が慣れていないせいか、カット技術はあまりよくない。サービスはカット、パーマ、染髪のほかマニキュアやペディキュアをしてくれるところもある。

### 11-2 理 髪 店

理髪店は市内に数多くある。やはり支払いは店によってドルか現地通貨である。美容院もだが、エイズ感染の対策がとられているとは考えられないので、顔剃りなどはよした方がよいし、清潔な店を選ぶようにする。

### 11-3 日本より持参した方がよい美容・理髪用品

散髪用のハサミまたは家庭用電気バリカンセットを 1組持参した方がよい。特に、子供がいる家庭では重宝する。電気カミソリも日本での購入の方がよい。

化粧品は売られてはいるが、使い慣れない香りのものが多いので日本からの持参がよい。ここで調達できるのは、ニベアの乳液だけである。

石けん、シャンプー、リンス、歯ブラシ、洗面器などほとんど売られているが、タオル、薬用石けんは持参した方がよい。

ドライヤーは売られているが、日本を含む東南アジアとヨーロッパ製である。

## 12. 観　光

### 12-1 地方旅行上の留意点

1992年にFRELIMOとRENAMO 間に和平協定が結ばれ、その後、ＰＫＯも展開され、現在に至っており、国内の旅行事情にも変化が起こっている。地方旅行には蚊取線香、懐中電灯、身分証明書を携行する。

### 12-2 主要観光地・保養地ガイド

独立以前は自然動物公園やマリンレジャーなどがほぼ全土で盛んで、ヨーロッパや南アフリカからの観光客でにぎわっていたが、現在は観光地の復興が始まったばかりでもあり、十分な設備は整っていない。

### 12-3 旅　行

(1) 自動車

1992年秋から国内を車両で自由に移動できるようになった。しかしながら、北部に向かう幹線道路はいまだにRENAMOに破壊された橋がそのままで、国内どこにでも車両で行けるという状態になるにはもう少し時間がかかるようである。それに、地方では夕方以降は武装した窃盗団が出没しているらしく、車両での移動は慎重を要する。

(2) バ　ス

地方行きの長距離バスが出ているが、バスは窓ガラスがないなどあたりまえであり、快適な旅とはいえない。

(3) 鉄　道

バスと同じ理由で利用できない。

(4) 航空機

マプトから地方の主要 6都市へは、国営のモザンビーク航空（ＬＡＭ）が飛んでいる。その他の都市へはセスナ機の路線が少しあるので、それを利用するか、チャーター機を利用する。ＬＡＭは新型ジェット機を導入したので便数も増え、発着時刻も以前ほど遅れなくなった。

### 12-4 エージェント

市内に旅行エージェントが10社ほどあり、国内はもちろん、国外の旅行も取り扱っている。また、航空券だけなら各航空会社でも購入できる。

### 12-5 ホテルなど宿泊施設の手配

宿泊施設の予約は、電話か手紙で直接するか、旅行エージェントに頼む。

## 13. 治安、緊急時の心得

### 13-1 暴動、クーデターなど

(1) 緊急時の連絡

在ジンバブエ日本大使館とエフリペル社が無線で結ばれており、緊急時は基本的には在ジンバブエ日本大使館の指示に従って、在留邦人緊急連絡網のとおりに連絡がなされる。

### 13-2 強盗、盗難

(1) 一般的治安状況

昼間なら、広い道路を女性がひとりで歩いていても特に危険はない。しかし、市場や繁華街のような雑踏ではひったくりが多く、油断ができない。また、車内にはものを絶対におかないで、トランクに入れる。市内では、自動車専門の窃盗団による被害が続発している。

家では留守をねらった空き巣の被害が多い。

(2) 防犯対策

外出時には、あまり高価なものを身につけず、大金は持ち歩かない。なるべく雑踏は避けて歩き、背後などに不審者がいないかよくみる。車には警報機のほかにハンドル固定装置をつける。

家については、知らない人を絶対に門の内側には入れない。家を短期、長期に留守にする場合も、使用人が信用できない時は日程や場所を話さない方がよい。

(3) 被害時の心得

外出時に被害にあった場合、身に危険を感じたらとにかく相手の要求を聞いて持っているものなどを与える。その後、警察に届けるが、警察は犯人逮捕の捜査をすることは普通ない。

家のものが盗難にあったら、警察に届けるが、警察はやはり犯人逮捕の捜査をすることは普通ないので、日本出発時に盗難保険に加入してくる方法もある。

もし、万一負傷して病院での治療の必要が生じた場合には、 4-2医療事情の項に準じて処置をする。

### 13-3 火災、風水害、地震

(1) 一般的災害発生状況

マプト市内では、外国人の住む地域ではほとんど災害の発生はないが、年に数回、大雨で道路が水没することがある。

(2) 防災対策

火災については、火気の安全使用について使用人を含めてふだんから注意したり、漏電がないかときどき検査もする。また、寝室や住宅が階上にある場合は、非常階段の位置の確認や地上までのロープの準備もしておく。

(3) 被災時の心得

落ち着いて、身の安全第一に行動する。

## 14. 出入国手続および帰国手続

### 14-1 入 国 時

(1) 空港施設概要

マプト空港は国際空港であり、国内線はもちろん国際線の飛行機も発着している。大きさは日本の地方空港並みである。空港には両替所、レンタカー事務所、土産物屋、喫茶店などがある。飛行機の発着を知らせるボードがあるが、変更があっても掲示は変わらないので、よくアナウンスを聞いておかねばならない。アナウンスはポルトガル語と英語である。

トイレは使用不可能なので、飛行機のなかですますよう、特に女性は留意する。

(2) 入国手続書類

飛行機のなかで入国カードが渡されるので、それに記入すればよい。名前、生年月日、国籍、パスポートナンバー、入国目的、入国経路など簡単なものである。また、外貨申告書も記入する。

(3) 入国審査

外貨申告書を指定の窓口に出して処理した後、ビザ、入国カードをパスポートに添付して入国審査に出せばよい。別にむずかしい質問はされない。

(4) 税関検査

入国手続がすんで、荷物を受け取ると税関検査に進み、荷物を開けてみせなければならない。もし、携帯荷物のなかで帰国、出国する時に持ち出したい荷物（例えばコンピューター、ビデオカメラなど）があれば、税関検査の前に申告所があるので、そこに行って一時持ち込みの書類をつくってもらう。この書類は無料ですぐできる。個人で使うものであるので、これらのものに税金を払う必要はない。この書類がないと持ち出す時に国内で購入したとみなされて、税金を払う必要が生じる。

(5) 空港内での留意点

マプト空港は国際空港であると同時に軍事施設でもあるので、写真撮影は禁止されている。また泥棒が多いので、絶対荷物から目を離さないことが大切である。

(6) 空港からのトランスポーテーション

市内に行くバスがあるが、運行時刻も正確でないので利用できない。タクシーはほとんどなく、運転手は英語を話せないし、いないことも多いので、なるべくなら在留邦人の出迎えを受けた方がよい。参考までに、空港から市内までタクシーは10ドルのようである。

(7) その他の留意点

### 14-2 出 国 時

(1) 出国時の概要

出発 2時間前には必ず空港に着くようにする。リコンファーム済みでも、オーバーブッキングの時がままあるので、席がなくなると乗れなくなる。したがって、空港に着いたら速やかに搭乗手続を行なう。搭乗手続の前に税関で荷物

を開けてみせなければならない。搭乗手続をして空港利用料を指定の窓口で払い、搭乗のアナウンスを待つ。アナウンスの後、出国手続となる。これは航空券、パスポート、出国カード（入国時に書いた入国カードの半券が出国カードとなる）をみせればよい。その後、手荷物検査があり、搭乗となる。

(2) 出国手続上の留意点

手荷物検査の時、メディカルやドルを持っていないかどうか聞かれる。現地通貨だけは持ち出し禁止になっている。ドルに関しては、外貨申告書を提示する。この時、申告額より所持金が多いことのないよう注意する。

14-3 帰国手続

(1) 帰国時に必要な事務手続

身分証明書の期限が切れていないか確認する。一時持ち込みで持ってきた品物の書類を揃えておく。現地で免許証を取得した場合は、持ち帰ること。

(2) 車の処分

友人、知人への売却や、新聞広告を出しての売却方法がある。マプトは車不足の現状なので、価格が安ければ短期間に売却できると思われる。手続も特にない。ただし、免税で購入した車は売却先が限られてくるので、早めに準備した方がよい。

(3) 家財道具の処分

マプトは日本製品のような品質のよい品物が不足ぎみであるから、一般に家財道具の処分、売却はさほどむずかしくはない。近年、経済の自由化に伴って市民や外国人の消費意欲は年々高くなっており、ほとんどのものが売却できると思う。特に物価の上昇も激しいので、帰国する外国人の売却価格をみていると、 2～ 3年使って購入時の値段とほぼ同じで売却しているのが現状のようである。普通は学校や国連事務所などの掲示板に売却リストを掲示させてもらったり、新聞に広告を出して買いたい人を探す。支払いは現金の前払いで、引き渡し日を話し合いで決める。

日本への輸送は、輸送業者か郵便局を利用する。

(4) 住宅の明け渡し

契約書に従って住宅を持ち主に明け渡すが、通常は外国人が住むと住宅はきれいになっているので、トラブルは起こっていないようである。

(5) 銀行口座の閉鎖

口座の閉鎖は簡単にできるが、ドルの引き出し制限があるので残高はいつもチェックする。

## 15. 私財の輸送、引き取り、購入

### 15-1 家財道具

(1) 輸送業者

モザンビークへの日本からの輸送は、一般的には大きな問題はない。マプトは南部アフリカ一の港を持っているから、船便でもたいていマプトまでは無事到着する。

もし、日本からアナカンで送る場合は、約10日ほどかかる。また、郵便局からでも送ることができる。ただし、郵便局からは 1箱10キログラムまでである。航空便だと 2週間前後、船便だと約 3ヵ月である。荷物の紛失は郵便局を使った方が多いので、大事なものはアナカンを使う方がよい。

ここには郵便局のほかにいくつかの運送業者がある。ここから日本にものを送る場合はこれらを使えばよいが、必ずしも安全とはいえない。しかし、送るものに保険をかけることはできる。

(2) 輸入手続

アナカンの場合は空港で受け取って輸入手続となり、郵便局で受け取る場合は郵便局の税関に行って輸入手続となる。

荷物は、本人の目の前で開け、なかを調べられる。いちおう赴任後 6ヵ月以内は非課税となっているが、その書類をつくるのにたいへんな労力と時間が必要で、しかもその手続料と税金がほとんど変わらないので、普通に税金を払って受け取ることもできる。

関税率はものにより違い、食べ物が50%、衣類が40%、ラジオなどが47%、書籍が10%などである。通常、申告額は税関吏が決めるが、本人が申告することもできる。税金額は税関吏によって違い、払わなくてもよい時もときどきある。

これらの荷物を受け取った時の書類は、すべて保管しておいた方がよい。今度、ここから荷物を持ち出す時、輸入したという証明がないと、現地で購入したということにされてしまい、二重に関税をとられることとなる。

(3) 家財道具の購入

### 15-2 自 動 車

(1) 一般状況

自動車の輸入業者や代理店があるので、それを通して自動車を輸入することができる。

日本で買って送るということは、できるだけやめた方がよい。それというのも、車種によって必要な書類が違うし、代理店を通していないので手続を自分でやるか代行屋に頼まなければならず、たいへんな労力が必要になる。また、車が港に着いてからも書類手続がすべて終わってもなぜかなかなか渡してもらえず、その間に部品を盗まれたりすることも多いからである。

もし車の輸入をするなら、マプトにきてから代理店、輸入業者に頼んだ方がよい。それでも手続に 3ヵ月ぐらいはかかる。

日本車の中古車専門の輸入業者もあるし、在マプトの日本の商社も車の販売

をしている。

(2) 輸入手続

輸入手続書類は輸入業者や代理店が揃えてくれるが、それでも足りない時は税関事務の代行屋に頼めば揃えてくれる。また代行屋は税関事務すべても代行してくれる。

個人で輸入手続をするのは免税措置だけでも書類の数が 5通以上必要となり、とても不可能と思われる。

(3) 任国での購入

新車をここの代理店で購入できる。その場合は輸入するよりは早く手に入るだろうし、手続もほとんど代理店が代行してくれるので、煩わしさはない。ただし、免税手続には多少手間どると思う。

中古車を買うのは比較的簡単である。市内に中古車屋もあるし、人の紹介や新聞広告、張り紙に気をつけていると必ずみつかる。例えば新聞に車を求めると広告を出すと、 100台ぐらいの売り主が現われる。中古車購入に際しては、車の書類がきちんと揃っていれば、売買契約書をつくって、お金を払えばそれで契約は成立である。注意事項としては、盗品ではないか、ナンバープレートがモザンビークのものかどうか（外交官ナンバーや外国のナンバーだと、モザンビークのナンバーにする時輸入とみなされ税金を払わなければならない）、書類が正式なものかどうか（仮のものだと更新のために毎月手続が必要）などである。

(4) 自動車登録

新車を買って登録する場合は、買ってから 1ヵ月以内に自動車登録所に行って登録をする。普通は 1ヵ月で書類ができるが、できない場合は仮の書類をつくってくれるので、それを持っていれば車は運転できる。

中古車の場合は正式な書類が揃っていれば何もすることはない。ただし、所有者の名前を変えたい時は新車と同じ手続をする。

(5) 免許証取得

マプトには自動車教習所があるので、免許証を取得することができる。しかし、ここはいつも順番待ちのことが多いし、言葉がポルトガル語なのでとるのにたいへん時間がかかるものと思われる。それよりも日本から国際免許証を持ってきて、それを運輸省でモザンビークの免許証に変えてもらえばよい。この手続は任国に到着後すぐ始めた方がよい。というのは、手続に普通 3ヵ月ぐらいはかかるからである。いちどモザンビークの免許証に変更すると、あとは何年でも更新手続をする必要はない。マプトでテストを受けて取得した場合は、5年ごとに更新が必要となる。

(6) 保険、税金

国営の保険会社（エモゼ）がある。この保険会社はほかに比べてかけ金は安い。ただし、いろいろと制約がある。製造後10年以上の車は対物、対人しかかけられない。つまり、自分の車の破損や盗難に対しては受け付けてくれない。対人に関しては無制限までカバーしているが、支払いが現地通貨なので信頼度

は低い。バイクは新車でも対人、対物しか受け付けていない。
　そのほか、民間の保険会社が 2社ある。
　車の税金は、 1年に 1回払う。金額は、車の種類によって違うが、だいたい 1,500円である。連絡はこないので、身近な友人達から情報を入れる。納入場所は自動車教習所内にある。税金を払うとステッカーをくれるので、車のフロントガラスに張る。

## 16. 社　交

### 16-1 風俗習慣

モザンビーク人は非常に穏やかな人達が多い。非常に人懐っこくやさしい。そして話好きである。

男女同一賃金で、男女差による出世の差別はないが、家庭のなかでは男性優位社会である。家に訪問しても、たいてい夫人は一緒に食卓にはつかず、ずっとサービスして、台所で残りものを食べている。うれしい時、悲しい時の感情表現はすぐダンスになり、みんなで踊り出す。踊りは皆たいへん上手である。

時間の観念は残念ながら日本ほどきちんとしてはいないが、ほかのアフリカ諸国と比べれば約束や時間についてはよく守ってくれる方である。時間の遅れもせいぜい 1時間ぐらいで、 1時間というのは彼らにとって遅れたということにはならないようである。

使用人を雇っていると、彼ら自身や親族の結婚、出産、葬儀、家の新築などをみることができる。このような時は普通、休みを与えるとともにいくらかお金（品物でもよい）を包んだ方がよいようである。

服装については男性は特に特色はなく、普通の洋服を着ているが、女性はカプラーナを中心とした鮮やかな服装を好む傾向にある。

### 16-2 パーティでの留意点

ここでは何十人もの大きなパーティはあまりない。どちらかというと家に呼んだり、呼ばれたりのホームパーティが中心である。

誕生日のパーティがいちばん多く、次に友人を招いての夕食会が多い。パーティではほとんど夫婦同伴であり、子供は招待者が連れてきてよいといわない限りは通常連れて行かない方がよい。

パーティではアルコールも出るが、酔っぱらいというものはみたことがないので、お酒に弱い人は飲む量を減らした方が無難である。

会話はポルトガル語か英語で、たまにフランス語も通じる。

学齢期の子供がいる場合は、子供の友達の誕生会に招待されることがやたらあるので、子供用の手頃なプレゼントを多数日本から準備しておくと便利である。

### 16-3 来客時の留意点

夜の食事に人を招待するのは、19:30～20:00ぐらいがよいようである。だいたい、いちど職場から戻って、シャワーを浴びたあとにくるので、あまり早いと急がせることになる。

食事は日本食が白人には結構喜ばれて、モザンビーク人にはカレーとかもう少し油っこいものが喜ばれる傾向があるように思われる。はしを出してもよいが、スプーン、ナイフ、フォークも添えておく。

相手がイスラム教など食べ物に制約がある場合もあるので、前もって招待の連絡をする時に、何が食べられないか聞いておいても失礼にはならない。

### 16-4 訪問時の留意点

招待されたら 5～10分遅れて行った方がよい。たいてい始まるのは30分ぐら

い遅れてからが多い。

お土産として、ワインか花を持って行くのが普通である。相手によっては砂糖、油、米などの生活必需品を持って行くと喜ばれることもある。

夜があまり遅いと帰宅が危険なので、22:00ぐらいにはなるべく帰宅するように心がけておいた方がよい。

16-5 禁止されている言動

モザンビーク人はカトリックが多いが、そんなに厳しく教義を守るタイプではない。しかし、神やローマ法王を冒瀆するような言動は慎むべきであろう。

大統領のことや政府のことを悪くいうのも控えた方がよい。以前は秘密警察のような組織がモザンビーク人や外国人の言動をチェックしていて、軽々しく政治の話はできなかったらしいが、現在は人々は比較的自由に政治の話もしている。

長い間、植民地としてポルトガルに支配されてきたことや、隣国が最近まで人種隔離政策をとってきた南アフリカということで、人種差別に関する話にも人々は敏感なので慎重な態度で臨む方がよい。

17. 任国官公庁

## 18. 在外日本関係機関など

19. 地方都市

# 任国情報をご利用の皆様へ

この任国情報は、国際協力のために赴任されるＪＩＣＡ長期派遣専門家、ＪＩＣＡ職員等の方々に、任国での生活上必要な最新の情報を提供する目的で作成されました。

本書の原データは国際協力総合研修所内のデータベースに蓄積されており、新しいデータが入手され次第、逐次更新できるシステムにしております。

現在までに、下記の国々について任国情報が整備されております。

なお、政府技術協力のために赴任するＪＩＣＡ役職員および派遣専門家は、技術協力協定や要請文書などの外交関係により、任国への入国および滞在にあたって特別の条件が付され、一定の義務が免除されるなどの特権が付与されています。本情報はこれらの条件に基づいた赴任マニュアルです。したがってご利用はＪＩＣＡの用務による業務渡航者に限らせていただいております。

また、本情報は外国人専門家という特殊なステイタスによる生活ガイドであって、それぞれの国の人々の一般的な暮らしぶりを紹介するものではありません。各国の一般的な各種事情については、ＪＩＣＡ図書館に多数資料をそろえておりますので合わせてご利用ください。

―――― アジア地域 ――――

1. バングラディシュ
2. ブータン
3. ブルネイ
4. 中華人民共和国
5. インド
6. インドネシア
   (ｼﾞｬｶﾙﾀ、ﾊﾞﾝﾄﾞﾝ、ｼﾞｮｸﾞｼﾞｬｶﾙﾀ、ﾒﾀﾞﾝ)
7. 大韓民国
8. ラオス
9. マレイシア
10. ミャンマー
11. ネパール
12. パキスタン
13. フィリピン
14. シンガポール
15. スリ・ランカ
16. タイ (ﾊﾞﾝｺｸ、ﾁｪﾝﾏｲ、ｺﾝｹﾝ)
17. ヴィエトナム

―――― 中近東地域 ――――

1. アルジェリア
2. バハレーン
3. エジプト
4. ジョルダン
5. クウェイト
6. モロッコ
7. オマーン
8. カタル
9. サウディ・アラビア
10. スーダン
11. シリア
12. テュニジア
13. トルコ (ｱﾝｶﾗ、ｲｽﾀﾝﾌﾞｰﾙ)
14. アラブ首長国連邦 (ﾄﾞﾊﾞｲ)
15. イエメン

―――― 太平洋地域 ――――

1. フィジー
2. キリバス
3. ミクロネシア
4. パラオ
5. パプア・ニューギニア
6. ソロモン
7. ヴァヌアツ
8. 西サモア

―――― 欧州地域 ――――

1. ポーランド

―――― アフリカ地域 ――――

1. ベナン
2. ブルンディ
3. カメルーン
4. カーボ・ヴェルデ
5. コモロ
6. エティオピア
7. ガンビア
8. ガーナ
9. ギニア
10. コートジボアール
11. ケニア
12. リベリア
13. マダガスカル (ｱﾝﾀﾅﾅﾘﾎﾞ、ﾃﾞｨｴｺﾞ・ｽｱﾚｽ)
14. マラウイ
15. モーリシァス
16. モザンビーク
17. ニジェール
18. ナイジェリア
19. ルワンダ
20. サントメ・プリンシペ
21. セネガル
22. セイシェル
23. ソマリア
24. タンザニア (ﾀﾞﾙｴｽｻﾗｰﾑ、ｻﾝｼﾞﾊﾞﾙ)
25. トーゴー
26. ザイール
27. ザンビア
28. ジンバブエ

―――― 中南米地域 ――――

1. アルゼンティン
2. ボリヴィア (ﾗ・ﾊﾟｽ、ｻﾝﾀｸﾙｽ)
3. ブラジル
   (ﾌﾞﾗｼﾞﾘｱ、ｻﾝﾊﾟｳﾛ、ﾘｵﾃﾞｼｬﾈｲﾛ、ﾚｼﾌｪ、ﾎﾙﾄｱﾚｸﾞﾚ、ﾍﾞﾚｰﾝ)
4. チリ
5. コロンビア
6. コスタ・リカ
7. ドミニカ共和国
8. エクアドル
9. グレナダ
10. グァテマラ
11. ホンデュラス
12. メキシコ
13. パナマ
14. パラグァイ(ｱｽﾝｼｵﾝ、ｴﾝｶﾙﾅｼｵﾝ)
15. ペルー
16. セント・ルシア
17. トリニダッド・トバゴ
18. ウルグァイ
19. ヴェネズエラ

# 任国情報コメント用紙

本書をより使い易いものとするために、皆様からの貴重なご意見（説明不足、間違い、誤字、脱字、ご要望など）をお待ちいたしております。ご記入に際しましては、任国情報に関することのみ具体的にご指摘くださるようお願いいたします。

〔送付先〕　〒162　東京都新宿区市谷本村町10-5
国際協力センタービル
国際協力事業団国際協力総合研修所
技術情報課　任国情報係

| 国　名 | | 年　度 | 年版 |
|---|---|---|---|

| 氏　名 | | 年　齢 | 歳 | 性別 | 男・女 |
|---|---|---|---|---|---|

| 利用区分 | 所属(担当)部課名 | 指導科目 | 派　遣　期　間 |
|---|---|---|---|
| JICA役職員 | | | |
| JICA専門家等 | | | |
| その他 | | (所属先) | (当該国での滞在期間) |
| 住　所 | | | |
| 電話番号 | | 日　付 | 年　月　日 |

| ページ | 行 | 内　　容 |
|---|---|---|
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |

| 国　総　研　記　入　欄 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 記事 | | 技術情報課確認印 | | | |
| | | データベース修正処理 | 課　長 | 代　理 | 担　当 |
| | | | | | |
| | | 月　日 | 月　日 | 月　日 | 月　日 |

「任国情報（モザンビーク）１９９３年版」
平成５年１２月１５日発行
編集・発行所　国際協力事業団　国際協力総合研修所
〒162 東京都新宿区市谷本村町10番５号
国際協力センタービル
電話（03)3269-2357
編集協力　財団法人　日本国際協力センター

67